

# Renaissance Symposium

'18秋

「阪神間モダニズムの観る景色」

シンポジウム記録



Mukogawa Institute of Esthetics in Everyday-Life  
武庫川女子大学 生活美学研究所

河崎晃一先生が平成 31 年 2 月 11 日に永眠されました。  
河崎先生が、いつも未来、そして次の世代へと、つないでいくことに徹せられていたそのお姿に、  
私たちは数えられないほどの薫陶をうけてきました。心から感謝いたしております。

生活美学研究所所員一同  
令和元年 11 月

■

「阪神間モダニズムの観る景色」  
シンポジウム 2018年秋

■ CONTENTS ■

■

1 阪神間モダニズムの観る景色

講演 1 河崎 晃一（甲南女子大学教授）

講演 2 河内 厚郎（評論家・文化プロデューサー）

講演 3 三宅 正弘（生活美学研究所員）

2 パネルディスカッション

登壇者：河崎 晃一（前掲）

河内 厚郎（前掲）

進 行：三宅 正弘（前掲）

総合司会：国吉 真夕（武庫川女子大学 大学院生）

（2018年12月1日 甲子園会館にて）

# 1

## ■ 阪神間モダニズムの観る景色 ■

■

**国吉：** 定刻になりましたので、ただ今より武庫川女子大学生生活美学研究所、第28回秋季シンポジウムを開催いたします。本日は行楽日和の綺麗な晴れの日の中、本学までお運び下さりましてありがとうございます。本日、司会進行を務めさせていただきます、武庫川女子大学大学院の国吉真夕と申します。よろしく願いいたします。

冒頭から大変恐縮ではございますが、本会場にて携帯電話の使用は出来ませんので、どうぞ電源のほうをお切りいただければと思います。ご協力よろしくお願いいたします。また本会場にてホームページや刊行物への掲載のために写真撮影をさせていただいております。もし差支えがある方がいらっしゃいましたら、会場のスタッフのほうまでお申し付けくださいませ。

それでは本日のテーマですが、当研究所におきましては、毎年一つずつテーマを設けておりまして、今年は「色」という一文字をテーマにしております。今回のシンポジウムにおきましても、「色」というテーマにちなみまして、「阪神間モダニズムの観る景色」というテーマで開催しております。多彩な、第一線でご活躍の講師をお迎えしておりますので、どうぞお楽しみください。それでは開会に先立ちまして、生活美学研究所所長、森田雅子よりご挨拶申し上げます。森田所長よろしく願います。

**森田：** 国吉さん、どうもありがとうございました。本日は第28回武庫川女子大学秋季シンポジウムへようこそお越しくださいました。生活美学研究所所長の森田でございます。今日は皆様のために選りすぐりの講師陣をお招きしております。詳細は後ほどご紹介があると思いますが、評論家で最近西宮市民文化賞を受賞したての文化プロデューサー、河内厚郎先生、甲南女子大学教授でアートディレクターの河崎晃一先生が駆けつけてくださっています。先生方ありがとうございます。そしてパネルディスカッションのコーディネーターは、食空間美学もてなし研究が専門で、我が生美研究生え抜きの三宅正弘研究員が担当しております。そして総合司会は初々しい、生活環



境学専攻三宅研究室修士1年の国吉真夕が務めさせていただいております。何卒、お手柔らかによりしくお願い申し上げます。

さて、生活美学研究所は、武庫川女子大学の一研究所として、平成2年、1990年10月、甲子園会館内に京都大学名誉教授、多田道太郎により設立されました。遊然と武庫川河畔にそびえるタワーと深い森が目印の甲子園会館は、フランク・ロイド・ライトの弟子である遠藤新のデザインと、林愛作の構想により昭和初期に竣工し、東の帝国ホテル西の甲子園ホテルと並び称された名建築ですね。このようにして本日はこの美しい館で、皆様をおもてなしできることを研究員一同、心より喜んでおります。時の経つのはやいもので、森谷尅久前所長に次いで私が三代目所長になりまして、もうはや10年が過ぎております。その間、鳴尾の学術研究交流館にも新たな地域の研究交流拠点もできました。また、何よりも地域の皆様と共にあり、地域の皆様に愛される明るく開かれた研究所でありたいと思っております。折しも武庫川女子大学が80周年をお祝いします来年の秋には、阪神鳴尾駅にも武庫女ステーションキャンパスが開設されます。現在工事中で、皆様にもご迷惑をかけているかもしれませんが、オープンカレッジと共同して生美研も研究会を開催する予定ですので、乞うご期待でございます。

さて、先程お話にもありましたが、今年的生活美学研究所の年間テーマは「色」です。そして今日のシンポジウムではこの年間テーマに寄り添い、広く学芸と生活のなかに息づく美学を探ります。今回のシンポジウムでは、輪廻とうつろい、そして変遷と再生の特性を伝える「色」に注目し、阪神間ルネッサンスのプロセスの様々な特色について認識を深めて頂ければなあと思っております。そもそも、阪神間モダニズムといえば、本日講師にお迎えしている河内厚郎先生が名付け親となった、大正デモクラシー期前後に生じた新しい文化運動の名称でありますね。明治維新以降、文明開化・産業振興により洋風の郊外都市型文化生活が謳歌されるようになったわけです。先人やパイオニアの卓越した先見の明により、六甲山脈を背景に大阪湾に開かれた阪神間の豊かな自然と人間の共生の世界観を反映して、特色ある文化的社会的構造と景色を編み出してきました。もともと道は、生き物や人々が塩や水を求めて川沿いなどに踏み固めてできるものですよね。しかし、明治維新以降は鉄の道というものができるわけですね。鉄道が設立されまして、小都の大阪、古都の京都と阪神間に物流だけでなく、人と人との知的交流のネットを生み出しました。甲東園、甲陽園、甲子園球場あり、甲子園ホテルあり。宝塚歌劇あり、手塚治虫のアニメあり、谷崎潤一郎、野間宏、小磯良平、小出楢重、朝比奈隆、大澤壽人と枚挙にいとまがありません。まさに文明の花

■

が咲き乱れた主力のような小宇宙を作り出したと言えるでしょう。また、これらの文化隆盛を基礎として更なる新旧交代のルネッサンスを生み出したのですね。河崎先生にご解説頂く具体美術協会の設立も然り、更にその後の兵庫県によるピッコロシアター、西宮の文化芸術センターの設立と繁栄については皆様もよくご存知のとおりでございます。まず、第一線でご活躍なさっているアートディレクター河崎晃一先生に「阪神間モダニズムと戦後具体美術の国際性」、河内厚郎先生には「グローバル社会における阪神間の道」。もしかしたら、万博の話が出るかもしれません。そして最後に、三宅正弘研究員による美食空間学の話ですね。それら三つの話によりまして、阪神間モダニズムの生み出した百花繚乱の景色について認識を深めて頂く趣向でございます。後半のパネルディスカッションでは、フォーラムの会員様方を交え、活発な研究討議を目指します。フォーラムの皆様、ぜひ先生方のお話に耳を傾け、且つ立場を変えてご提案くださいませ。ディスカッションの輪に身を投じてくださいませ。本日の研究討議大いに楽しみにしております。

さて最後に、研究所の今後の活動に対する抱負を述べたいと思います。皆様はじめ研究員の強力なサポートがあり、お陰様でなんとか目標にしていた明るく開かれた研究所というのは、ほぼ徐々に達成出来つつあるのかなと思っております。更に生活美学研究所高度化のためのプロジェクトとして、阪神間の地域にあらわれている様々なシンボルを研究する甲子プロジェクト、甲子園スタディーズなど、地域と共に取り組み、地域資源を活性化する研究プロジェクトが始動しております。また来年度は、研究所が創立30周年を迎え、記念事業として研究成果の集大成となるべく生活美学叢書の刊行企画を進めております。今後とも生活美学研究所をよろしく願っています。本日は最後までごゆっくりと知的共演と交流をご堪能くださいませ。改めてご来場ありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

**国吉：**ありがとうございました。それでは早速、シンポジウムのほうに入らせて頂きます。本日は三つの講演とパネルディスカッションを用意しております。講演はお一人40分ずつをお願いしております。その後15分間の休憩をはさみまして、後半はパネルディスカッションを予定しております。

最初の講演は河崎晃一先生にお願い致します。テーマは「阪神間モダニズムと戦後具体美術の国際性」でございます。先生は1952年に芦屋市にお生まれになり、1974年に甲南大学を卒業され、1977年には長谷川三郎歌集を編纂され、1978年からは染色による美術作品の発表を行われております。1989年には芦屋市立美術博物館学芸課

■

長となられ、吉原治良具体美術協会阪神間モダニズム展などを企画されています。2006年から2012年まで兵庫県立美術館学芸リーダー、そして館長補佐を務められ、2013年から甲南女子大学文学部教授に就任され、1993年ベネチアビエンナーレをはじめ、2015年アメリカテキサス州ハラス美術館で開催の「白髪一雄/元永定正展」、2018年ニューヨークギャラリーでは「具体」1953年から59年を企画されています。それでは先生、よろしく願いいたします。

**河崎：**ご紹介にあずかりました河崎でございます。よろしく願いいたします。皆様のお手元の封筒の中にレジユメを入れさせていただきました。大体お話する流れというものを書いてございますので、これを見ながら話の流れを読み取って頂ければと思います。まず、ご紹介に預かりましたように、私自身、現在甲南女子大に在籍しております。永年美術館学芸員という職にあったものですから、博物館学という資格コースですね、美術館、博物館、意外とご存知ないのですが植物園とか動物園ですとか、水族館であるとか、そういうモノとモノとを繋いで展覧会などで「みせる」という形にする職業が学芸員です。その学芸員の資格というのを取得するコースを教えております。それと専門的には、今日お話しする具体美術協会ということ、それからチラッと今お話しが出た長谷川三郎、後ほどご紹介しますけれども、やはりこの阪神間、芦屋に住んだ今日お話しする吉原治良と全く同世代の画家のことを調べてきております。経歴見ていただいたらわかるように、普通の大学で教える立場としては、あるいは美術館学芸員としては学部がずいぶん違うなどというのをお感じになれるかと思うのですが、大学までは全く勉強をしていないという、ただただ、運動するためだけに大学へ行くという生活でして、卒業してからの一念発起といいますか、学生時代よりも今のほうがはるかに本を読んだり、色んなことをお話するための勉強をよくしているなど思っていて、言うならば、最後で辻褄を合わせようというような魂胆でございます。

それです、今日私に与えられたテーマ「阪神間モダニズムと戦後具体美術の国際性」ということなんですけれど、国際性に関しては具体の流れの最後に、現在、具体というグループが国際的にどのように評価されているかということをお話したいと思うのですが、そもそも具体とは何なんだろう。それからその具体を形成した地域、つまりこの阪神間、大阪阪神間ですね。それがどういうものであるかというお話をしていかないと、時代の流れというのがわかりませんし、もちろん歴史っていうのは一日にして出来るわけではございません。今日お話しする具体の今日までの流れを見ても100年以上とい

■

うような時代の流れがあつて今が評価されていると言っても過言ではないと思います。

それで、順番に従ってまず「阪神間モダニズム」とは何かということで、まずその前にこの「阪神間モダニズム」という言葉について考える必要があります。先程森田先生のほうからご紹介ありましたように、「阪神間モダニズム」という言葉はいわゆる造語で、ここにおられる河内先生の書かれた本の最後に出てくる言葉です。実際にそれじゃあそれを分けて、「阪神間」とは何でしょう。今我々は普通に阪神間、阪神間と使っていますが、例えば旅行に行つて、まあ東京辺りですと「どちらにお住まいですか?」と聞かれれば、西宮にお住まいの方は「西宮です」と言うと「ああ、あの甲子園球場のある」となるでしょう。神戸の方は「神戸です」と言えば、大抵「神戸」だけでわかる。芦屋の場合は「ああ、あのお金持ちの住む場所ですね」という反応が大体返ってくるでしょう。それから宝塚は「歌劇のある」というようなかたちで反応がみられると思います。もともと「阪神間」という言葉も造語ですね。ちょっと頭を巡らせていただければいいと思うんですけど、例えば「阪神」。これは大阪の「阪」と神戸の「神」を結び付けた、要するに「大阪と神戸の間」。それで、これは関西と関東、どちらが先に言い出したのかはわかりませんが、東京でも「京葉」「京成」という言葉を使っています。それから関西でも「阪和」「京阪」というような言葉がありますね。ただ、後に「間」が付く地域というのは聞いたことがないのです。例えば「京阪間」という言葉はあまり使わない。「阪和間」、大阪と和歌山ですね、「阪和間」という言葉もあまり使わない。東京へ行つても、「京浜間」、横浜との間「京浜間」とはあまり言わない。もともとこの「阪神間」というのが造語で、昔調べた記憶を辿ると、「阪神間モダニズム」と言われる時代が始まったのが1800年代の再後半、1880年、1890年よりもっと後、90年から1900年、20世紀が始まる時代なんですけれども、まず鉄道が開通します。そこへ人々がやって来る。まあ、今のJR、当時は国鉄です。それから1900年を過ぎてから、1906年でしょうか、阪神電車がまずいわゆる今の阪神間、大阪神戸間を通る。それから大正時代になってから阪急電車を通ります。その間に、阪急はもちろん宝塚線というのがメインでしたから、そちらへ人が流れていくというようなかたちで鉄道会社ができるわけです。そこで鉄道会社もPRで、今で言う阪急電車ですとTOKK(トック)などと一緒で、阪急は「山容水態」、それから阪神は「郊外生活」という冊子を出しています。それを読み解いていきますと、阪神のほうでは、「当初明治時代の終わりには、「大阪と神戸の間」という言葉しか出てこないんですね。大正時代になって1910年のちょっと前くらいから、「阪神間」という言葉が突如



■

として出てきます。以来、このあたりの地域を「阪神間」と呼ぶようになったようです。それで「阪神間モダニズム」というのは1997年に、私が勤めています芦屋市立美術博物館、西宮大谷記念美術館、それから兵庫県立美術館、当時はまだ近代美術館でした。それと谷崎潤一郎記念館、この四館合同開催、同時期に開催するというで開かれた展覧会なんですけれども、その時にこれを「阪神間モダニズム」という展覧会名にしようということで、大もめにもめました。公の美術館が展覧会を開くのに、展覧会名に造語を使ってはならないという学芸員がいたのです。一方で、美術館というのは新しい時代を率いていかないといけないところなので、そういう風に内容をタイトルによって決めていこうという意見もありました。そしてやはり「モダニズム」という言葉が一番引っかかったのですが、建築でも文学でも美術でも色々なジャンルで「モダニズム」の定義付けがなかなか定着していない。そういうなかで、結局押し切ったようなかたちでこの名前になったんです。それで、展覧会の発端と言うのは実は、1993年だったと思います。まさにこの場所で開かれた「阪神間サミット」というものがありました。1990年代に阪神間研究とか色々名前が違う三つほどのグループがあって、そこに何人かの研究者が集まってきました。それらがサミットというように集まって発表するという会があって、私も皆さんがおられる席に当時の西宮大谷記念美術館の学芸課長だった篠さんという方と二人で参加して、お互いに何か展覧会のネタになればということで来ていて、話を聞いて「ああ、これは展覧会に出来るな」と。それと、研究ですとやっぱり一般的に開けてこないで、展覧会にすれば多くの人に観てもらえます。美術館の展覧会とはそういうもので、研究者がいてそれを基に展覧会を作っていくということで、それが一般的になっていくということなんですけど、まさにそれにぴったりでした。美術館ではありながら、地域。後で聞くとジャンルの的には地理学になるだろうと言った方がおられるんです。これはよく裏付け取ったわけじゃないですが、そういわれれば地理的な部分かなと思います。そういうようないきさつで、1995年の秋に開催しようと思っておりましたら、ご承知のように1995年の1月に阪神淡路大震災という大変な地震が起こって、美術館も一時休館になるというようなことでした。当初の計画は、当時まだ1995年というのは戦後50年なんですね、それで、その時のテーマというのが戦前の50年の地域の発展と戦後の50年は、展示では見せないけど考えていこうというコンセプトを西宮大谷記念美術館の篠さんと考えて、展覧会を作っていました。それぞれの美術館でジャンル分けをして、担当していくということだったんですけれども。とにかく美術館というのは点で観に行く。ひとつの美術館

■

へ観に行く、というのを4館というこの阪神間にある美術館を点で結んでいく。そこから面にしていこうということで。面とはどういうことかと言うと、いわゆる古くから残っている建築であるとか、その土地その土地の特徴的なことであるとか、そういうものを見せていこうということで意気込んで企画を立てたんですけども、阪神淡路大震災で大体思っていたのが全部なくなってしまいました。それで97年。2年経てばいいだろうということで、展覧会を再企画しまして、97年の秋に展覧会を開催したわけなんです。ですから、一部では、展覧会の中で地震がなかったらこんなもの出品できなかっただろうという、つまり地震で壊れている建物から、そこにある階段であるとか窓であるとかそういうものを外して、美術館で展示したりとか、そういう風なこともある意味できたわけなんですけれども、本来ならば本来の場所で皆さんに観ていただくということを計画していました。

それじゃあ、阪神間モダニズムの時代というのとは言う、先程も申しましたがやっぱり1900年ちょっと前、19世紀の終わり頃から鉄道の開通と共に、阪神間モダニズムというのはおそらく当初のキーになるのは鉄道の開通とやはり大阪商人、富裕層の台頭ということがいえると思うんですね。それで、関東と大きく違うのは、鉄道の開通というのは関東も同じなんですけれど、やっぱり富裕層、いわゆる商人ですね。商売をしていられた方々が大阪のほうが盛んであった。ひとつには東京という首都で、官僚が多いなかでなかなか商売というのが出来にくかった。それが一方大坂では、官僚というの東京に比べればはるかに少ないですし、そういう意味でも商売人が台頭していく、富裕層になっていくというような時代であったのではないかと思います。それが鉄道の開通により当然のことですが、まあ今もそうで少しはおさまっていますが、鉄道が開通すればそこに住宅地を作るとというのが常套でありますし、阪急電車ができた梅田から宝塚へ開通したのはその典型ですね。大阪に百貨店を作り、人に買い物に来させる。その逆の宝塚には休みの日の娯楽施設、宝塚歌劇などを作り、人はどこに住ませるかという、池田豊中を中心に、雲雀ヶ丘などの地域。つまり住場所を中心にして、仕事に行くにしても遊びに行くにしてもどっちみち電車に乗らなきゃいけない。つまりお金を払わなきゃいけない。それによって鉄道が儲かるという、わかりやすい構図を作り上げていった。それで、阪神電車は当時、大阪と神戸を結ぶということで開通したんですけども、その逆で人のいるところに沿って大阪神戸を結んだ。だからその印象といいますかその残像が残っていて、現在阪神電車はカーブが多い。大阪の方、尼崎を過ぎると随分カーブがありますね。それが用途を広げていくという前提。それでその反省かどうかわかりませんが、大正10年



でしょうか、阪急電車が大阪神戸を結んだ時は、ほぼ地図の上を定規でひっぱったんじゃないかと思うくらいに、一直線に大阪神戸を結んでいますね。ですから、未だに所要時間は阪急の方が速いです。ただ、阪神は頑張って全部高架にしていますから、こないだの台風でも被害がなかったのが阪神だけです。土砂崩れとかないわけですから。今となっては阪神の強みが出てきたという感じがするんですけど、そんな風に鉄道会社の存在っていうのは非常に大きかった。それとやはり住宅開発ですね。人が住むということ、それがモダニズム。それで、どういった人が住んだかというところで、やはり大阪商人のオーナーです。恐らく先程も申しましたけど、阪神間モダニズム、1900年以前はこの辺り、西宮、芦屋、東灘…東灘の、今で言う御影、住吉辺りです。マンションの名前見てもらったら野村不動産とか、必ず野村、それから住友。それから田辺、そういう名前が出てきますけれど、当時のオーナーがほとんど住んでいます。それからもうひとつは香雪美術館があります。村山、朝日新聞社社主ですね。そういった方々が、広い土地を地元の方から譲り受けて住んでいた。そういう人たちが最初で、そこから阪神電車が開通することによって、芦屋ですとか西宮ですとか。西宮辺りはお酒屋さんとか古いですけど、そのお酒屋さんも何代も続いてくるうちに商売のほうはうまくいく。それで新しく自分たちの生活様式というのは時代と共に、モダンな生活になっていくというようなかたちで、時代が進みだしたわけなんです。そういう風に、それが1900年を過ぎて、1920年、30年くらいで大体、我々が知る阪神間モダニズムの生活様式というのが固まってきた。それまでにどういうことがあったかということ、住宅地の開発で現在のJR芦屋駅の北側の辺りですとか、西宮の夙川辺り、今津近辺といったところがどんどん住宅開発されていきました。わかりやすいのが時代的に基盤の目に道路が整備されていくというような形で、いわゆる郊外住宅ですね。それで、そこに移り住んで来られた方は、初代の野村、住友というようなオーナーではなくて、そこに勤める方々、あるいはそれ以外のたくさんの方々ができてそこに勤める方々でした。そしてその方々は、今で言うところと部長クラスと言いますか、社員のなかでもかなり上の管理職の方々が、芦屋、西宮というところに住んでいったという時代です。それで、後でスライドでも出てきますけれども、その社交の場というのが、まあ神戸はご承知のようにもう開港150周年ですか。それ以前から外国との扉を開いた貿易都市だったわけですね。ただ、神戸に住んでる外国人、あるいは神戸に住んでるそういうモダニズム的な生活様式の方々は、神戸からいくと西は須磨、塩屋、ジェームス山までで、東はどうやら現在の石屋川を越えなかったみたいです。だから我々は展覧会の時

■

も、それじゃあ阪神間モダニズムの地域ってどうするんだっていう話をした時に、広げると展覧会としてバラバラになって成立しないということで、結局石屋川から武庫川の間、北は宝塚、そして阪急電車の関係で少し雲雀ヶ丘ですとか池田とか、そういうところを入れようということで、今お聞きになってわかるように、川西、伊丹、尼崎っていうのは入っていないんですね。それでだいぶ伊丹の美術館からは、どうして入れてくれないんだという風に言われました。色々理由を考えた挙句にひとつだけ考えたのは、「伊丹はお城があったでしょう。」というもので、西宮や神戸も昔はあったんですけど、もうそれは黙っておいて。「西宮、芦屋、神戸東灘の地域はお城はないでしょう。」という。それともうひとつは、その地域に住む人達の新しい住宅開発、六甲山が近いんで農地にはならないというような、水が溜まらないんですね。そういうようなこともありまして、阪神間モダニズムのテーマを決めたのです。

それで、そこがこの後お話ししようと思っている吉原治良とモダニズムの関係のルーツになるということは、吉原治良自身が大阪の生まれです。皆さま、特にご年配の女性の方はよくご存知かと思いますが、吉原製油ゴールデンサラダ油という名前がありますよね。ここのいわゆる御曹司だったわけです。それで写真を見ますと、家が今の御堂筋の淀屋橋の交差点のど真ん中に立っていて、昭和の初めに御堂筋が出来ている、その立ち退きで芦屋へ移って来られたということになります。吉原治良は芦屋から関西学院、当時関西学院というのは今の西宮ではなく、神戸の王子公園のところにありました。今でも記念館になっていますね。文学館でしたでしょうか。吉原は芦屋からそこへ通っていた。つまり、阪神芦屋の駅のすぐそばですから、おそらく阪神で通っておられたのでしょう。そういう環境で吉原治良は育ったわけです。ですから、吉原治良のなかでは、阪神間というのは本当に幼少期を過ごした場所であったわけです。そのなかで二人の画家、一人は有名な今も京都の美術館で展覧会をやっている藤田嗣治。彼との出会いが吉原の一生を左右した、それから具体を生むきっかけとなったと言っても過言ではないと思います。藤田はずっとパリにいました。その藤田と一緒にパリに留学していたのが上山二郎という画家です。上山は画家としては決して名を成してはいないのです。パリで藤田と同じアパートに、上下で住んでいた。そして、恐らく藤田に絵を習っていたのでしょう。図柄からいうと藤田とそっくりな絵があります。この画家が東京の人なんですけれども、関東大震災の時ちょうど東京にいて、その後引っ越すのに芦屋の地を選んだということです。そしてそこで吉原との出会いがありました。狭い街ですから。それで藤田が17年ぶりに、1929年に帰国した時に藤田

に吉原を会わせるわけですね。そこで吉原は藤田に絵を観てもらって、1回目は全く人の影響があり過ぎるという評価を受けました。つまり藤田から言うと孫引きのようなものですね。自分の絵に影響された人の影響を受けて絵を描いている、そういうようなことだったので。しかし2回目、昭和8年に藤田が帰ってきた時にもう一度会って、その時は絵を絶賛してもらった。そして二科会に入選する。そういう藤田との出会いの経験が具体の原点となっていくということなんです。

ちょっとスライドを観て頂きながら。これが1929年頃、初めて個展を大阪で開いた頃の吉原治良です。そして、これが実は吉原ではなく、先程から話がちらっと出ています、長谷川三郎という人の家族なんです。サンルームで、恐らく大正末、1922～23年頃の写真です。逆に言うと今、こんな豪勢な家は滅多にないです。サンルームがこれだけの広さがある。10人くらいが横に並べるとサンルームです。場所的には芦屋の宮川という小さい川沿いの芦屋浜にありました。吉原の家は、今の阪神電車の芦屋駅のすぐそばでした。それで、もう一人福井一郎という奈良出身で芦屋にやって来た画家、この人が実は大正時代の末に自分の家の庭で展覧会をやったんですね。これも具体へ繋がるひとつの話で、吉原治良と福井一郎というのも繋がりがありました。それから先程の長谷川三郎とも吉原治良、福井一郎、それから上山二郎というのは繋がりがありました。まあ、教える立場にある二人と、高校生であった二人の繋がりとということです。これは昭和9年でしょうか。左が上山二郎という藤田を紹介した人です。この場所はおわかりですね。まさにここ（限：武庫川女子大学甲子園会館）です。探せばすぐにどの場所かわかると思います、二人がどこに座っていたのか。この写真から見ても、それから芦屋の美術館時代、色々なおうちからアルバムとか見せてもらった時に、この武庫川女子大学の校舎の前身である甲子園ホテルというのが、いかに阪神間の社交の場になっていたか。当時これだけの規模のホテルというのは神戸に東和ホテルというのがトアロードにあった。それくらいで、大阪には大きなホテルはないし、もうひとつ夙川に長期滞在型のホテルがあったんですけど、そこもそんなに大きくないですし、ここがやっぱり昭和初期の社交の場であったと言うことができます。そして戦後、1945年というのが普通、世界の美術史では時代的にも切るわけですけれども、具体というのは、今一言では「戦後世界最大の前衛美術運動」と言っていていいと思います。ヨーロッパ、アメリカにはこういう美術運動というのは、1940年代、50年代後半にはまだ出てきていません。その後60年代に入ってやっとニューヨークで、これも美術運動というよりは美術の流れですね。そういうものが生まれてきたといえるのですが、それに先駆けて具体とい

■

うものがあります。

それで吉原治良がそのグループに集まってきた若手、吉原治良より15～20歳近く離れた人たちに行言ったのが「人のまねをするな」「今までに見たことのない絵を描け」。これ、わりと美術の世界の専門用語のように思いますが、意外に普通の言葉なんですよ。何年前かにノーベル賞取られた方が、人のまねをしないで研究をしたらノーベル賞に辿り着いたとおっしゃっていたような記憶があるのですが、やっぱり新しいものを見つけていくということは人のまねをするということ、それから今までに見たことのない絵。「人のまねをするな」とは非常に難しいことで、我々でも人のまねをしないでおこうと思っても、誰かがどこかでやってるんですよ、過去に。吉原治良というのも、集まった若手にこういう言葉を投げかけるんですけど、彼自身の絵というのは、まさに人のまねで埋め尽くされた絵なんです。だけど、ただひとつ他の人と違うのは、人のまねをし尽して、そこから自分の、誰も見たことがないものを生み出していったという、そこがまあ凡人と違う所と言ってよいかと思います。

具体の活動としては1954年から1972年に吉原治良が急逝するまでの約18年間続くわけなんですけれども、のべ50数名のメンバーが参加しています。第一期、第二期、第三期と世代ごとにわかれていきますけれども、皆、吉原治良に絵を見てもらいたいということで集まったのです。現在ですと、絵を勉強するとなると、大学へ行って美術を専攻して、ゼミの先生に色んなことを指導してもらおうということですけど、具体の場合は絵を描いていた人達が集まって来て、吉原治良に絵を見てもらうのです。しかし吉原治良には指導という言葉がないんですね。いいか悪いか、YesかNoかだけなんです。ですから持って行って、吉原治良が気に入ればそれでいいわけです。まあ、気に入られた人達が具体のメンバーということになるのですけれども、気に入られなかった人もたくさんいるみたいで、パイと横を向いたらそれっきり、ここをこうしたら良くなるよというような言葉は一切無かったと聞いています。それくらい厳しいと言えれば厳しいし、そういう意味では具体というグループそのもの全体が、吉原治良の作品と言ってもいいくらい。ただ当時、具体といのはあまりにも前衛的過ぎて、日本でなかなか受け入れられなかったということもあります。一方で、世界では1960年、50年代の終わりから、フランス人の美術評論家が日本までやって来て、具体の作品をたくさん持って帰っています。ですから60年代から70年代にかけてずっと、具体は日本よりもヨーロッパのほうで展覧会などを数多く開いています。これは僕も色々考えたのですが、ひとつは、皆さんも美術に興味のない方でも印象派という名前はご存知だと思います。モネですとか、ゴッ

ホですとかそうそうたる、恐らく現在世界で一番人気のある集団という時代といえるでしょう。ヨーロッパの美術というのはそれ以前はフランスの写実主義。印象派の次はフォーブ、野獣派と言われるかなり乱暴に描いた絵ですとか、ピカソの立体派ですとか。そういうような平面の絵画のなかで一步一步進んで、それが新しい時代を作ってきたということがありました。それでそのなかに、戦後になって同じような歩みを続けているヨーロッパに、具体という絵画の領域、全くそこに入ってこないものが持ち込まれたら、彼らは恐らくびっくりしてしまったんでしょうね。東洋の小さな国で一体何事が起ったのかというような、そういう目で見たので、一步一步進むということに非常に先鋭的な価値観を見出していたヨーロッパ人が、それをずば抜けて表現した具体というものに驚いてしまった。

吉原治良がかなり参考にしたものは書です。これは実は西宮の海清寺のふすま絵なんですね。これを見て吉原治良は非常に感銘を受けて、書というものは日本の伝統的なものですね、そういったものと絵画というものを結びつけることはできないか。そして書道の世界の前衛的な書道をしている人達とも接点を持った。いかんせん、書はやはり皆さんもご承知のように字から始まります。それから、画家の描く、こういう白黒を含めた抽象的な動きのある絵というのはやっぱり自由な造形から始まっています。それが平行線をたどって、クロスしないんですね。かたや字という型のあるもの、かたや自由奔放な描き方がある。そういったような流れで、書とも結局は離れてしまう。ここから数枚お見せするのは初期の具体の作品で、これは白髪さんの丸太に斧で傷を付けていってる。これ、芦屋公園という阪神の芦屋、昔の芦屋川の河口口にある松林の公園なんですけれども、この発端、吉原治良がここで展覧会をやるとしたのは、野外での展覧会というのは当時活気的なものですから、これのヒントがさっきラッとお見せした福井一郎の自邸の野外展というのになるのではないかなと思うのです。ここでもやっぱり人のまねというのが入ってきますね。それであと、舞台でも展覧会をやるんですけど、舞台もこれは芦屋に当時、昭和20年代にいた田中千代というファッションデザイナー、この人の仕事を手伝ったり、舞台でのファッションショーを手伝った。その延長上で舞台の脇役である美術装置ですね、それが主役になった展覧会をやるということで、こんな風に絵画ではない、あるいは彫刻でもないというような世界ができたのでしょうか。これは落書き板ぼんというようなもので、屋外で電気をつけたりとか、これはライトアップのはしりじゃないかと思います。現在、プロジェクションマッピングとか言っているものよりもはるかに早いですよね。確かに、戦後の日本でのメディアアートの原点と呼ばれるように定義付けされてい



ます。次は田中敦子さんの電気服です。これはカラーでついているのですが、1992年に芦屋の美術館で再現展をやろうということでスタートしてすぐに野外の同じ場所同じ時期に、夏の暑い時期に展覧会やった時、意外とカラフルだった。こういう白黒の写真を見ているよりも意外とカラフルな風景だったという。そしてこの時に、観に来てくださった方との出会いで僕が忘れられないのが、1955年56年に開かれた野外展のオリジナルを見ていると言う方がいたことです。その年配の女性が言われたのが、1955年、56年、つまり戦後10年、やっと私達は自由になれたんだということを、この展覧会を見て思った。やはりその時代を象徴した、一主婦の言葉じゃないかなと思いました。具体もわからない、わからないと言われるけれど、こんな感じ方もあるんだという風に僕自身が感じました。

これが初期の具体メンバー。それでこれは、東京の小原会館、小原流の会館ですね。吉原治良自身と、当時の小原豊雲さんという方が親しくて、先程見せた野外の展覧会を小原豊雲さんが見て、展覧会を東京でやるんだったらいつでも場所を使ってくれていいということで、東京の小原会館で1955年10月に展覧会が開催されています。そこで開かれた展覧会が白髪一雄さんです。足で絵を描く、尼崎出身の方ですね。『泥に挑む』という、ダンプカーで泥を運んで来て、それを水で濡らしてその中で暴れ回るということをしました。まあ、最初で最後のパフォーマンスですが、ヨーロッパ人にはすごい評価なんです。こんなことをする人はまずいませんし、これを観て驚きだと思うんですよ、前衛性と言いますか。それから他にも紙を破る、村上三郎さんという方もいます。それから、アドバルーンに絵を描いて、難波の高島屋での展覧会の時にそのアドバルーンで絵を吊り上げるというものです。これは私が芦屋の美術館に勤めだして初めての海外展。具体をテーマにした展覧会で、イタリアのベニスで、2年に一回ベネチアビエンナーレで具体が選ばれた。まあこの時に、ですから93年ですね、具体がなかば公式に世界に紹介された。歴史的に見ても、ベネチアビエンナーレの日本館ではなくて、本部が企画する展覧会というのは、印象派とかそういうのも全部そうなんですけど、ここで展覧会が開かれた後に世界の美術史のなかに組み入れられるという階段を登っていくというような形で海外で評価され始めた。ただ、これが93年なんですけど、先程申しましたように、もう50年代の終わりから具体というのはその道の美術関係者のなかでは、イタリア、フランス、アメリカでも、日本ですごく前衛的な美術があったということは知られていた。だからこういうところでも割と広まりははやかったし、これ以前に開かれたヨーロッパでの展覧会でも非常に、若い学芸員、美術館関係者が観て驚



■

きを持って、日本に研究に来た人がたくさんいます。そしてヨーロッパの今のコレクターが、具体の作品をコレクションして飾ったりして、コレクターにとっては非常に魅力のある絵画であった。それからこれはニューヨークのギャラリーでの展覧会ですね。こんな風にして2015年から、ごくごくここ10年以内のことなんですけれども、ここに書いてありますように、僕が携わってからでも93年のベネチアビエンナーレをはじめ99年にはパリで、2000年はローマで、それから2005年くらいでしたか、スイスのルガーノというきれいなリゾート地で展覧会をやりました。あと2010年以降は特に、マーケットが広がるにつれてアメリカでもですし、アメリカが企画する戦後の世界の前衛的な美術の企画には必ず、具体のメンバーの作品が入ってくるようになってきて、世界に認知されるようになってきました。そして2015年に僕が日本の国際交流基金と一緒にやった展覧会で、ダラスで開かれました。そんなに大きな規模じゃないけど、たくさんの人が訪れたそうです。ダラスに具体とか、日本の前衛美術が大好きなコレクターがいるんですよね。そのダラスのコレクターが、亡くならたら全部美術館に寄付すると言っていますから、おそらくダラスがアメリカでの日本美術の最大のコレクションを持つ美術館になっていくと思います。そんな風に世界の美術館で今も、シカゴですとか、ヨーロッパでもイギリスのテート・モダン、それから現代美術のメッカといえますか、フランスのポンピドゥーセンターとかに具体の作品がコレクションされています。それまで、皆さんご承知のように、戦前の梅原龍三郎であるとか安井曾太郎などの近代洋画の画家達には、ヨーロッパ人は見向きもしないんですね。こんなのはヨーロッパにはいくらでもあるぞということ。海外で取り上げられることも日本人の企画では1、2回あったみたいですけど、ヨーロッパ側からの企画というのは一度もありません。

最後になりますけど、これが決定版といいますか、2013年の2月のはじめから6月まで開かれた、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で開かれた具体展です。行かれたことのある方は覚えておられるかもしれませんが、螺旋形の建物なんですね。フランク・ロイド・ライトの設計です。ここで世界的に認知される。企画したのは二人の、アメリカ人とカナダ人なんですけれども、一人は高校生時代に芦屋に住んでいて、ジョージ大学を出ました。もう一人は具体の研究のために2000年になってから日本に留学してきて、芦屋の美術館で勉強をしたという二人の女性が企画した展覧会で、始まる前のニューヨークタイムスで、絶賛されたんですね。ニューヨークタイムスの美術評論ってすごく権威があるらしいんです。それで、そこに書いてあった言葉では、これからの美術を見ていくには、ヨーロッパ、アメ

■

リカの要するに美術先進国を評価していくだけでは正しい評価はできない、東洋、日本という国の発表を観て行かなくてはならないということが書かれていました。それが世界の美術関係者あるいはこれから美術を勉強していきたいという学生達、そういう人達に色々聴いていますと、やはり色々な芸術のジャンルの人達でも、日本の具体という名前はアメリカ、ヨーロッパの人達は結構知っているんですよ。それから、ひとり若手の日本美術とか、彼は西洋美術だったかな…具体を知っているというので、どこで学んだの？と言うと大学で学んだというのですよね。おそらく今（日本の）大学で日本の美術のなかの具体というものを教えている人というのはいないと思うのですよね。それこそ、呼ばれば僕がどこへでも教えに行きますけれども。ただ、それくらい、日本での評価というのが…。ただ、なぜということ色々考えると、先程申しましたヨーロッパでの評価との違いは、ここまで見て頂いたように割と誰でも出来ること。画像がないのですが、吉原治良が最晩年、大きな画面に円を描いたんですね、丸です。ちょうど白鶴でしたでしょうか、「まる」という商品のロゴがありますがまさしくあれなんですけど、ただ一筆描きじゃないんですよ。ドローイングは一筆描きなんですけど、大きな画面はもう、いじましいように面の色んなバランスを取りながら、非常に悪い言葉で言えば看板屋みたいな形で、円を描いていつている。それが大きな画面で、美術館とか手にされると、すごくどっしりとした日本的な抽象絵画に見えるという。そういうようなものなんで、誰にでもできる、特に我々世代、永年勤めてきて一つの会社に仕えてきて、定年を迎えて自由になった。でも何十年働いてきたしがらみから解き放たれない。美術館へ行くとわけのわからない抽象画がかかっている。「こんなもの誰でも描けるじゃないか」と言うのは、大抵我々世代の男性です。耳の痛い方もおられるかと思いますが、女性はなぜが言われませんか。「あ、こんなのがあるんですね、面白いですね」と非常にキャパが広い。それだけでも女性を見直したなという、それくらいに誰でも描けそうだなと思うし、紙を破るのも誰にでもできる。だけどそれを何十年も続ける。足で描くことを三十年、四十年続けるということ、これはもうただごとではないです。まあ、そこに芸術的価値を見出すわけではないのですが、やはりヨーロッパ人というのは、それから美術館の人達というのはそういうところに芸術的価値を見出していきます。ただここで、そうしたらヨーロッパにたくさん具体の作品がいつているじゃないか、日本に残らないのは残念だと、僕も散々言われたんですけど、色々なお手伝いをしていて。でも、日本のこの近辺の美術館には、例えば兵庫県立美術館、芦屋の美術館もそうです。それから姫路、今度大阪に出来る新美術館、

大阪中之島美術館ですかね、そういうところにはかなりの数の具体作家の作品がすでに収蔵されています。これは、自分がそういう仕事をしているからというもありますが、80年代、要するに具体がまだまだ評価されない時代から、美術館学芸員というのは、戦後日本美術史のなかのひとつとして具体が大切だということで収蔵していたということがいえると思いますね。時代がやっとなあ、海外で追いついてきた。日本ではこれからだということです。日本での評価はそういうかたちで、もちろん東京の国立近代美術館なんかでも収蔵していますし、そういう意味では日本の代表的なものになっているというかたちです。

まあ、非常に駆け足だったんですけれども、10分ほど時間も過ぎまして。尚、具体の国際性の根拠といえますか、そこは僕は最近特に思うのは、阪神間モダニズムの時代。まさに吉原治郎イコール具体なんで、そういう意味ではその時代。この後のシンポジウムなんかでも、そのあたりを掘り下げられればと思っているのですが、いかに戦前の50年というのがこの地域にとって大切な時代であったのか、大切なものを生み出したのかということ、具体というものを象徴的にすれば見えるんじゃないかと思っております。以上でございます。ありがとうございました。

**国吉：**河崎先生、ありがとうございました。それでは、引き続きまして、河内厚郎先生にお願い致します。テーマは、「グローバル社会における阪神間の位置」でございます。河内先生は西宮市のお生まれで、演劇評論家として執筆業に入られました。これまでに「関西文学」の編集長を2期15年つとめられ、現在は阪急文化財団理事、兵庫県立芸術文化センター特別参与、はびきの市民大学学長、三田市総合文化センター事業企画アドバイザー、文化庁芸術祭審査員、芦屋市民センター・公民館・ルナホールの事業受託者（河内厚郎事務所）など多岐に渡ってご活躍なさっております。著書には『わたしの風姿花伝』、『淀川物語』などがございます。それでは先生、よろしくお願い致します。

**河内：**あの今の具体の話、大変面白い話でしたが、前半にかなり丁寧に阪神間モダニズムの由来について河崎先生がお話になったので、わりとオーソドックスに話されたと思うので、ちょっとそれじゃない話をしなければいけないと思います。

それで先程、所長さんからもこの度、西宮市民文化賞を頂いたという話がありましたが、その受賞の理由のひとつが、一番大きな理由がですね、西宮市が書いているんですが、阪神間モダニズムとい

■

う言葉を作って広めたという。これは私ちょっと、確信がないんですけれども、ウィキペディアにもそう書いてあるし、まあせっかく言ってくれているんだから、私が広めたということなんです。一応80年代の後半から私は使っています。最初、学生時代東京へ行きましてですね、阪神間という言葉がなかなかわかってもらえないので、色んな言葉を考えました。後に編集者をやりましたから、キャッチフレーズとか考えるのが好きなものですから、「阪神間ウェイ・オブ・ライフ」とかですね、色々作って見たんですが、どうも広まらないんです。それでまあ、もしかしたら広まるかもしれないなと思って始めたのが「阪神間モダニズム」なんです。モダニズムという言葉はありますし、そこにくっつけたらちょっと広まるんじゃないかと思って。でもなかなか最初広まりませんでした。それで、この生活美学研究所が出来て92年に私、パネリストで出講しまして、その時くらいからぼつぼつ使う人が出てきて、21世紀になってからは、本当に登記しておけば良かったと思うくらい、今不動産屋が使いまくっているといいます。もっと早く、私が目ざとく権利を取っておけばですね、今頃本当に左うちわで生活できたんですが、ものすごくよく使われていますね、マンションとか。超高級マンションでは使われていませんね、大したことないところでは使われています。イメージを上げるために。だからまあまあ、地元では広まってきたなど。全国的にはまだまだですが、ややマイナーな段階は脱したなという気がしています。ですから、そういう風に名付け親と言われるのは嬉しいのですが、なかなかこの阪神間モダニズムの本質も難しいので、ただ新しいものばかりじゃないという。それで最近、橋爪節也さんという方がある雑誌に書いていまして、阪神間モダニズムという言葉が流行りだしているのは間違ったことだと。本当は大阪モダニズムなんだと言うんですね。あの方は大阪のお仕事をされているので当然なんです、これはある程度事実なんです。大阪の方のブルジョアジーが阪神間に移って来て、兵庫県でこういうのを展開したので、ルーツから言うとお阪モダニズムなんですけど、やはり今の大阪のイメージで大阪モダニズムは流行らないわけです。それは不幸なわけだけども、まだ阪神間モダニズムの方が流行るんじゃないかと思います。

阪神間という言葉も難しくですね、「阪神モダニズム」もちょっと違いますね。「阪神」は阪神タイガースとか、それからもう実態はだいぶ違うんだけど阪神工業地帯を連想させますから、どっちかというダウンタウンのイメージなんですよ。ところが、阪神間ってどういう所ですか？と東京で聞かれて、例えば芦屋がありますと言うと、ちょっとイメージ混乱するみたいなんです。芦屋というのは山の手のイメージであるみたいなんです、どちらかというのと



ころが阪神沿線というダウンタウンだと。阪神沿線は甲子園ですとか、香櫨園とか芦屋とか、モダニズムのイメージがあるところがあるんだけど、一般的にはそういう印象があると。だから、未だにどうという言葉を使ったらいいのか非常に悩んでいますけど、ようやくマイナーな段階を脱したので、阪神間モダニズムに統一していきたいのですが、これが単なる舶来モダニズムじゃないというのが私の持論でして、当然大阪からやってきた人達が上方文化を身に付けていましたから、それと神戸からの輸入文化が混合するかたちで、新しいブルジョア文化を生み出していったというのが一番わかりやすい解釈なんですけど、私は歌舞伎の評論を本職にしているんですけど、今年度内に、共著ですが歌舞伎のパトロンの本を出します。どんな人達がパトロンになったか。これは船場商人が中心なんですけれども、その船場商人達が明治の終わりから六甲山麓のほうに引っ越して来て、実はこの研究所を最初に開いた多田道太郎さんの一家もそうなんです。本町のほうで繊維関係の店を営んでいる商人で、これが岡本に家建てて、そういう人々なんです。パトロンじゃなくて役者のほうもですね、大正の終わりくらいから、阪神間に移住が始まりました。現在、片岡仁左衛門という大変人気のある役者がいますが、昔は片岡孝夫と言いましたが15代目ですね。12代目が苦楽園に屋敷を構えまして、それまでは皆大阪市内に住んでいました。ミナミの方に住んでいたのが、苦楽園に山荘のような家建てまして、その息子さんの市村吉五郎が私の小学校の先輩になるんですけれども。その後、スーパースターだった初代中村鴈治郎の長男の林又一郎という人が、夙川の方に家建てまして、その孫が林与一です。それから、戦争前後に一番人気のあった女形の3代目中村梅玉という人が芦屋に家建てまして、阪神大震災の直前までその家は残っていました。非常に日本的な雰囲気の家でしたが、震災で壊れてまして、現在はある有名な指揮者が住んでいます。佐渡裕さんです。佐渡さんが家を建てる時に、庭石がたくさん出てきたという話をなさっているそうです。ですから、かなり古典的な文人も阪神間に移って来たので、そこで独特のモダニズムが醸成された。だから、前回このシンポジウムに未生流の家元がお出になられたそうですが、未生流と小原流が船場で起こっているわけですが、そのうち小原流が御影に本部を移しましてですね、未生流は今でも本部は大阪ですが、阪神間で未生流やっている人はすごく多いですよ。家元も確か住んでおられたと思いますが、特に小原流が典型ですが、伝統的な中から新しいものを生み出していった。戦後も小原流がデパートで新しい生け花展示して、新しいトレンドを作り出した時代がありましたけれども、そのへんがやっぱり阪神間の面白いところで、単なる舶来モ

■

ダニズムではないというところですね。だから、震災前までたくさんありました阪神間の洋館。これも洋館の形をしているなかに、ちょっとこう日本的な部屋がある。あるいは日本的な形をしながら、洋風でもあるような形。伝統をふまえながら、ちょっと遊び心でモダニズムを付け加えるような、そういうなかから新しい風土が生まれてきたので、ここが大事じゃないかと思うのです。ただ新しいだけじゃなかった。

それで、私に与えられたタイトルは「グローバル社会における阪神間の位置」という、大変難しくて大事なタイトルなんですけど、今河崎先生がおっしゃった具体ひとつでも、もう個別にはグローバル社会のなかで認められているものがたくさんあるんですね。具体はまさにそうらしいのですけれども。今日会場にお越しになっているかどうかわかりませんが、今神戸女学院の方で、関西学院出身の大澤壽人という…そんなに皆さん反応しないですね。まだ知らない方が多いみたいですが、作曲家。これ今非常に評価の高い人で、実際にコンサートも人がよく入るようになっていますが、大澤壽人さんは大澤と書いて「おおざわ」と読む。そして壽の人と書いて「おおざわひさと」というんですが、吉原治良と同じで関西学院出身で、それで戦前ボストンフィルハーモニーを最初に指揮した日本人なんです。それで戦後、小澤征爾がボストン指揮しているでしょう？ アルファベットで書いたらどっちも「OZAWA」なんで、むこうでは同じように思われてるんじゃないかと思うんですけど。大澤はボストンからパリに渡って、パリで発表した曲が大変高い評価を受けているんですね。それで、戦後も映画音楽とかポピュラーな曲なども作られているんですが、大作曲家だったんじゃないかと今どんどん評価が上がって行って、神戸女学院がそういうプロジェクトをお作りになって、気長にやっていくらしいので、これから見て頂いたらいいと思います。国内では新日本フィルとか色々なところが演奏していて、最近、西宮北口の芸術文化センターでも大澤壽人の曲を演奏したところ大変反響があったので、世界的にも認められていくと思います。

それから、私にとって一番大事なものは文学で、今から約20年程前から、国が先頭切って日本文学を世界に翻訳していく運動を始めまして、これは石原慎太郎等が提唱しました。やはり日本語の壁がありますから、翻訳をもっとやれば広まるはずだと。昔、日本文学で世界、特に欧米に人気のある御三家っていましたよね。谷崎潤一郎と川端康成と三島由紀夫。我々は国語で習ったから、漱石、鴎外、芥川とかがピンとくるんだけど、欧米では谷崎、三島、川端というのが大変有名で、まあ悪口言うんですけどね、ホモセクシャルの三島由紀



夫にロリコンの川端康成に、マゾヒストの谷崎潤一郎か、と。変態ばかりじゃないかという説もあるんだけど、実際に評価はすごく高いので、まあ私の視点では、この三人は日本文学のなかで珍しく、割とブルジョアが描けるというかですね、そういう見方も出来るんじゃないかと思うんです。漱石とかになりますと、ちょっと書生文学というか、ブルジョアジーの文学ではないですよ。ちょっとまた違うタイプのものですから、だからそういう見方も出来るんですが。だから谷崎潤一郎が最初のノーベル賞候補になってすぐに亡くなってしまいましたので、次川端康成が取って、次は三島由紀夫って言うたら割腹自殺しまして、それから永いこと出ませんでした。その間も候補に何人か名前が挙がりました。井上靖とか遠藤周作、それから意外と知られていないのですが、西脇順三郎という詩人、それから安部公房、こういう人達の名前が挙がりましたが、非常に阪神間にゆかりのある人が多いんです。パリのポンピドゥーセンターという現代文化センターがありますね。とても変わった建物で、具体的な現代美術の殿堂ですが1970年代に出来ましたけれども、あそこですね、フランス人から見て世界の国々を代表する文学作品をフランスの俳優が朗読してカセットテープに入れているというコーナーが出来まして。フランス人というのは非常に嫌味ですよ、頼みもしないのにその国に乗り込んで行ってミシュランを作るという、自分達が基準を作るという、ヴェルサイユ以来の非常に嫌味な民族ですけども。それで、日本文学で何を最初に選んでいるのか。フランス人がですよ。井上靖の『猟銃』という小説なんです。これは芦屋を舞台にした小説で、映画にもなりました。芦屋教会も出て参りますけれど、これは名作ですよ。短編ですが手紙の書簡体で、阪神間って割と手紙の書簡体の小説が多いんです。谷崎潤一郎の『世』とかですね、今言った井上靖の『猟銃』とか、それからもうちょっと新しいところで宮本輝の『錦繡』。非常にプライベート空間でしょう、ここは。あの何て言いますか国家がどうあるべきかとか論ずる風土ではなくて、割と個人の私生活のなかに色々な物語がある、『細雪』がまさにそうですね。それから、平安の女流文学にちょっと似ていてですね、プライベートな書簡とか日記の形式を借りた文学で成功しているものが多いですね。それで、最初にまずその井上靖の『猟銃』、これなかなかいい小説ですよ。ハイソな不倫の世界を描いているんですけど。それから、その後野坂さんの『火垂るの墓』が入ったと思います。それから安部公房。安部公房は阪神間にあまり縁がないんだけど、あと遠藤周作が入りましたし谷崎も入っています。これはやっぱり、翻訳されているからなんですね。翻訳されてないと無理ですよ。谷崎、三島、川端もですね、まさに日本文学を紹介したドナルド・キーンとかサ

■

イデンステッカーがこういう人達の文学が好きだったというのがあるので、そういう意味では、読んでもらえなければ話になりませんから。それで、今名前を挙げた人達がヨーロッパで比較的良好に読まれているのは、翻訳した人達がいるわけなんで、その一人に須賀敦子という人がいます。今は知られるようになりましたけれども、『ミラノ霧の風景』で女流文学賞を取られて、なんか瞬く間に絶賛されるようになったと思ったら亡くなってしまって、非常に惜しい人なんですけど、聖心女子大学を出て東京と阪神間を行ったり来たりした人なんですけれど、この人がイタリア語とフランス語が堪能でしたので翻訳しているんですね。『猫と庄造と二人のおんな』とか。まあ考えてみれば、阪神間出身の女性が、阪神間ゆかりの文学をひいき目があったのか、多めに翻訳しているというのもあったのですが、実際にもうかなりグローバル化されているんですね。それからさっき、なんで伊丹だけ入れないんだという声があったそうですが、伊丹の出身の江戸時代の有名な上島鬼貫という俳人がいますが、この俳句に昔フランス人が曲をつけまして、歌曲になっているのがありまして。いっぺん郷帰り公演というのを柿衛<sup>かきもり</sup>の蔵でやったことがありましたけれど、現実にはもう認められているというかですね。それが阪神間ではエリアというか一帯感でもってくられていないものだから、非常に勿体ないですよ。まあ阪神間の行政が七市一町に分かれていまして、兵庫県のほうに県民局ってありますけど、それだけではちょっと対応できないので、やはりこの武庫川女子大学のような、ひとつの阪神間の文化研究センターみたいなものが、ある程度系統立って存在していく、そういう仕組みが必要であるなというように思います。

私達は大体この120～130年で阪神間モダニズムが醸成された。それはまあ事実なんですけれども、先程の河崎先生のお話は、戦前と戦後が繋がっているという意識がだいぶあった発言でしたよね。私もそう思います。1920年代、30年代のモダニズムばかりが論じられるのですが、戦災にあったにもかかわらず阪神間らしさというのは、昭和40年代くらいまでは続いていたと思います。私のイメージのなかでは。それで、震災はやはり大きかったですけれども、それでもまあ、そういうイメージが無くなったかと言うと、そんなこともないような…。まあ昔は阪急神戸線に乗ると、日本のどこよりも年配の女性がおしゃれをしている。若い人はどこでもおしゃれですが、年配の女性がおしゃれである阪急神戸線っていうのは定番でして、今はそこまで…。阪急神戸線でもなんかももの食べてる女性増えたなという感じがしますけれども、それでもまあ市民の風土としてまだ阪神間らしさというのがなんとか残っているから、人が移って来て住みたがるということもあると思うんです。これは、昔は公<sup>おおやけ</sup>に対しての





<sup>わたくし</sup>私<sup>が</sup>頑張ったと言われるところで、まあお金持ちが多かったからですけれども。そういうことはありますが、70年代の後半以降は行政も割と頑張るようになった。宝塚歌劇にしても小林一三が作りましたし、甲子園球場も阪神電鉄ですし、要するに公のもんじゃないわけですよ。私企業なり個人が作ったわけで、その方がメジャーなんです。学校でもまあそうですね。公立学校出た人には悪いけど、私学出たの方が地元らしい雰囲気ありますよね。甲南が今度100周年を迎えられるそうですけど、河崎先生なんて甲南という感じですよ、いかにも。そうなんだけれども、やっぱり税制が昭和30～40年代に変わってきまして、なかなか旦那衆が維持できなくなりましたよね。その頃から比較的阪神間の行政が頑張ってきた。特に兵庫県が頑張ってきたので、最初の方に出来た多目的ホールっていうのはなかなかね、例えば西宮市民会館アミティホール。評判悪いでしょう？なんていうか貧乏臭いっていうかね。そしてルナ・ホール（芦屋）は、あれは凝り過ぎて面白いんだけど使いにくいところがあります。だから、「多目的ホールは無目的ホール」と言われた、その例なのですが。70年代の終わりに兵庫県はピッコロシアターを作りました、これはもう現代劇に特化するということで、演劇学校を作ります。演劇技術者の学校、舞台芸術の学校も作りました。それから劇団も作ってしまいました。それから次に宝塚にベガ・ホールを作りました、これはもう室内楽しかやらない、クラシックに特化するということで、ここでやっているコンクールなどは非常に権威があります。それから伊丹の市長矢埜興一さん、あの人がAI・HALLというのを造りました。年配の人はあまり知らないと思うのですが、JR伊丹駅前、旧有岡城のところにあるんですけど、ここはニューウェーブとって、新劇よりもちょっと新しい演劇しかやらない。いわゆる小劇場と呼ばれたものですね。大阪の小劇場がどんどんなくなっているものだから、今AI・HALLがものすごく貴重なものになってしまっています。しかも劇作家養成塾を開いているものですから、ここ出身の劇作家が出てきているんですね。要するに客席とか移動出来るような、いわゆるニューウェーブと言われるものです。それから阪神間ではホールが専門的に分化してきているので、全国的に非常に進んでいます。その上に兵庫県が西宮北口に芸術文化センターという一応最後の集大成作って、よく人が入っていますので、もうはっきり言ってローカルなレベルじゃなくなっているんですね。今度平田オリザっていう有名な劇作家が、兵庫県の豊岡、日本海側ですが、劇団ごと引っ越してくることに なりましてですね、地元の文化行政、よくやっているという、ある意味で全国に発信できるものに近づいてきているので、この前国が中央省庁の移転に名乗りを上げよと言った時に、阪神間

■

のどこか名乗り挙げるべきだったと思いますね。この前、宮田文化庁長官に聞きましたら、文化庁今度一部京都に移るんだけど、これ、なんのしがらみもないと彼が断言していました。手を挙げたからだと言っている。僕はそうだと思います。だから手を挙げていい時に来ているんだけど、やっぱり行政もバラバラですし、なかなか統一したシステムになっていないから名乗りをあげない、これは勿体ないです。そろそろそういう時期に来ているんじゃないかなとも思うのですけれど。

120～130年の間に阪神間モダニズムが醸成されたという話になりました。その通りなんですけど、もうちょっとさかのぼって考えてみたらどうなるか。世界に向かって阪神間を打って出すとなるとですね、もうちょっと長いスパンで自分を物語る努力をしていいんじゃないか。例えば、阪神間のブルジョアの歴史がどこから始まるかと言うと、ひとつにはですね、伊丹で清酒が発明された。山中鹿介の子孫がですね、戦乱を逃れて伊丹へやって来て、そこで色々な偶然から清酒を発明した。伊丹の街を歩いていると、清酒発祥の街と書いてあります。なんでも、従業員を叱責したところ、その従業員が怒って逃げてしまおうとした時、腹いせに酒の中に灰を落とし込んだら、偶然にそれがすみざけになったという伝説が残っていますけれども。その山中家が鴻池になるわけですね。伊丹では産業ブルジョアで、酒で財を成したのが大阪の今橋、船場に進出して両替商になる。これが、清酒を発明した時に江戸に運ぶと大変人気が出ました。江戸は全く生産基盤がありませんでしたから。酒も醤油も全部こっちから運んだわけですが、伊丹の酒で「丹釀」というのが大変人気が出て、最初は陸で運びますので東海道が発達していくわけです。それで後にもっとたくさん運ぶということで、海よりの灘の方から直に樽廻船で運んで行くということになりました。当時江戸は100万人の人口を抱えるという、世界最大の都市でしたから。そこに生産基盤がほとんどなくて、消費するばかりのですね、巨大な消費都市なんです。上方の場合は生産基盤と消費基盤の両方がまあまあバランスあるんですけど、それを運んで行くので江戸時代にある種の資本主義がここから抬頭してくる。我々が昔、資本主義がどうやって成立したかということで、マックス・ウェーバーのプロテスタントの勤勉の倫理って学びましたよね。だけどそれだけでは、働くだけでは消費を果たしていないので、必ず使う論理というかですね。これはゾンバルトという人がいましたけれど、ヨーロッパの家計簿を研究した人ですけど。ヨーロッパである時期に、大変なプレゼントブームが起こった時期がありました。羊飼いが一生かかって貯めたお金で憧れの貴婦人にブローチを送るとかですね。ああいうことによって手工芸が大

■

変発達して、ギルドが生まれて。要するに無駄遣いですね。それによって資本主義が起こったと。つまり、働く論理と使う論理の両方が調和しないと、巨大な流通というのは起こってこないわけですね。そういう風に江戸時代も上方商人の堅実な勤労と江戸の浪費がですね、成立して起こってきたので、ここにも伊丹の酒造業、ひいては灘五郷の酒造でもいい、ひっかかっているわけなので、阪神間の近代のルーツをさかのぼることが出来るんじゃないかと思うのです。酒屋さんが阪神間でたくさん学校を経営していらっしゃるし、醸造業そのものが伝統的な産業ですけども、経営している学校とか美術館はモダニズムの雰囲気を持っていらっしゃるからね。

これから発表するのは私の仮説でして。このシンポジウムで93年か92年に河合隼雄さんが来たんですよ。ユング心理学者で文化庁長官、丹波篠山出身で、猿の博士で有名なお兄さんがまだご存命です。あの河合隼雄さんは70過ぎて文化庁長官になって、忙しくてですね。数年間休みなしで、なんか初めて休暇取ったら倒れて死んでしまったんじゃないかったですか？だから年取って忙しい人は休んだらだめですね。急に休んだら混乱するんですよ、身体が。もうずっと働いたほうがいい、身体のリズムがそうになっているんだから。その隼雄さんが言ったことが非常にヒントになっているんだけど、阪神間のルーツをどこに取るかですが。弥生田能遺跡とか、そんなこと言ったらきりがなくて、もう色んなものがありますから。それで、ここで宗教に目を向けてみると、私は西宮市民なので、一番特徴的なのがえびす信仰だと思います。日本中に何千とあるえびすさんの総本山が西宮えびすです。これは大変面白い神さんで、「えびす」と呼ばれる前は日本神話に出てくるヒルコの神さんでした。イザナギとイザナミの子で、可哀想に不具の姿で生まれた子で、葦船に乗せられてちぬの海に流されたといわれています。内陸の方では居場所がなかった神さん。日本神話、日本人というのはわりとなあなあで、どんな暴れ者のスサノオでもちゃんと居所を与えてもらっているし、それなりに共存するのに、ヒルコだけは追放されて大阪湾に漂ったのです。これが神戸の和田岬の沖に浮かび上がっているのを見て、西宮の百太夫正清という人が気の毒だと西宮の海岸に祀ったのがえびすさんのルーツなんです。まあ、いつ頃のことかはわかりませんが、神話の世界ですから。ここまではどんな本でも書いてあるので、そういった伝承があるというのは本当のことです。これが後に福の神えびすに変わりますが、これはかなり面白いことで、大体、阪神間というのは摂津の国ですから畿内に入ってるわけで、旧首都圏の交通の重要な地域で、まあ日本全体で見たら繁華な地域に入りますよね。しかも畿内ですから。しかし、えびすと言えば東夷とか、辺境

■

というイメージがありますよね。だから私は子供の頃から非常に違和感があって、なんでそんな辺境みたいに言われているんだろうという思いがあったのですが、イメージとして異端の神様だったのでしょ。ですから、ちょっとこう謎めいていまして、海岸に流れ着く漂着物のようなもののイメージもあります。細かいことはよくわからないのですが。

河合隼雄がアステイオンという雑誌で発表した説がありました。これはサントリー文化財団が主宰して、TBSブリタニカが編集した雑誌なんですけど、ここに河合さんが、ヒルコは日の子のことだと。太陽の子という意味で、これは農耕民族ならば大地母神ですから太陽は女神なんですって。アマテラスのように。ところが遊牧民族では、男性が強いのでゼウスなどのように太陽神は男のイメージ、父親のイメージなんです。農耕民族では母親のイメージなんです。だからアマテラスが中心になるんですよ。それで河合説では、日本で男の太陽神というのはヒルコだと。つまりイメージの問題ですけどね、心の問題です。しかしこれは日本の組織の中では生きられないと、そういう神さんがヒルコであると、だから追放したんだというのが彼の説です。これは彼が系統立てて立証する前に亡くなってしまったので、残念なのですが、もしそういう仮説を楽しむならばですね、つまり西洋的な自我のルーツというのは、男の太陽神になるわけですよ。女性の太陽神でなくて。ですから、日本で根付かなかつたある種の西洋的な自我が、若干ひっかかってきたのが阪神間なので、ちょっと強引ですが。そこに阪神間モダニズムがどっかに繋がって連鎖できるんじゃないか、これから皆で検討していきたい。これはいろんな心理学者とか神話学者で研究していきたいテーマで、そういうことがもし、説明できるようになってくれば、世界に向けて日本がどういう地位かということを行うことができます。面白い仮説で、当分100年200年は遊べるテーマだと思うんですよ。「イザナギ、イザナミ、二柱の神が産みたまひしヒルコの神は三歳になるまで足が立たなかった。二親の神様はそれを哀れと思いつつも、葦船に入れてちぬの海に流した。」と、これがヒルコの神様ですね。これは、西宮神社の秋祭りに、海上船渡というのがありまして、このヒルコの神様を船に乗せて、和田岬まで運んでいくのです。その神さんが浮き上がったところまで。大船団が行きまして、それで和田岬のほうでえびすさんの色々な行事をして、今度は陸路で帰ってくるのです。それで陸路で帰ってくる時に、馬で帰ってくるのですが、馬や神様の目を突いたらいけないということで、西宮神社の門松は逆さまになっていて、「逆さ門松」といいます。最近また復活しました。門松を逆さにするというのは、西宮が一番古い習俗なんです。それが織

田信長に潰されて、四百年途絶えていたんです、海上船渡は。それが1999年かな、阪神大震災から復興する時に、震災の前まで復興させるだけじゃなく、そのもっと前になくなったものまで復興させようということになりまして、復興したんですよ。そのヒルコの神様が海上をゆくという。海上をゆくのも毎年じゃなくて、ヨットハーバー周辺だけの年もありますけど、来年また盛大にやるみたいです。和田岬まで巡航してくる。これがまあ、阪神間の原像で、平清盛の頃に書かれた色んな文献にも出ています。清盛が福原に都を作りまして、公家たちが高台から見下ろしていると、西宮の方からバーッと巡航が来てですね、ヒルコの神様を祀っている様が見えるというのが二回ほど描かれている。それから一遍上人の絵伝にも。一遍上人は和田岬に眠っているんですけど、絵詞、絵伝にも出ています、それが。そういうものが阪神大震災の後復活しまして、だから阪神間モダニズムとえびすさんって、今まで誰も結び付けたことがないテーマだったわけですが、もしかしたらある種のモダニズムのルーツではないかという仮説を立ててみたら面白いんじゃないか、というのが今日の私の前半の締めの話になります。

現在毎日新聞で、毎週月曜日、コラムを連載しておりますので、そういうことを色々書いております。「河内厚郎の文化回廊」。毎日新聞ってね、本当にギャラ安いんですよ。だけど何書いてもいいんで、自由な新聞なので、そういうことを色々書いています。なかなか朝日新聞では載せてくれないんですよ。「何を言ってるんだ」って、仮説ばかりですから。

私が関西の文化人で懐かしく思い出す人といえば、やっぱり尊敬していた梅棹忠夫っていう人なんですけれども、私が子どもの時から追っかけをされていて、テレビ番組も全部観ていたのですが、初めて会えた時にはあの方失明されていて、やっと会えたのにあの方は私の顔を知らないのですが、当時私がラジオ番組を持っていたものですから、それを聴いてくださっていた。目が見えないものだから、よくラジオを聴いておられたんですね。それで私が初めて名乗った途端に、ものすごく喜んでいただきまして、「ああ、あなたですか、いつもラジオでホラを吹いているのは。」と。それは誉め言葉なんですよ。仮説を出さなきゃだめだという。梅棹忠夫っていう人は、10秒にひとつ仮説が出るようなすごい人でしたから。それからもうひとり、外からやって来て阪神間のことをよくわかってきているなと思った人が、劇作家の山崎正和という人なんですけれども、今も住所は西宮で、この前文化勲章を取られました。あの方が外から見て、阪神間の良さというのをよく捉えて、地元だけからだとわからないところがあるんですよ。谷崎潤一郎も外から来た異

■

邦人だからよくわかった面があるので。それで山崎さんが西宮に移って来てから、もともと文明批評家として一流でしたけれど、こっちへ移って来てから出したテーマが、吉野作造賞を取りましたけれど、「柔らかな個人主義の誕生」というテーマで。この「柔らかな個人主義」というのは阪神間の市民風土を表す一番適切な言葉で、いわゆるニュータウン的な全くギスギスした、個人個人がバラバラという感じでもなく、かといって村落共同的な集団でもなく、ゆるやかな社会的な繋がりを持ってコミュニティを作っていくという、そういう意味で「やわらかい個人主義」というのは比較的阪神間にふさわしい言葉じゃないかと思って感謝している次第です。これで終わらせていただきます。ありがとうございました。

**国吉：**ありがとうございました。それでは引き続きまして、三宅正弘先生にお願いいたします。テーマは「美食空間学から見た阪神間」でございます。三宅先生は1969年芦屋市にお生まれになり、大阪大学大学院博士課程を修了、フランス人文科学研究所・受入教授などを経て、現在は武庫川女子大学生活環境学部准教授をつとめておられます。専門は都市計画・美食空間学。大阪市・区長アドバイザーをつとめておられます。『甲子園ホテル物語—西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト—』などをはじめ、多数の著書がございます。それではよろしくお願いいたします。

**三宅：**こんにちは。よろしく申し上げます。少し最初に私のことに触れさせて頂きたいと思うのですが。私は芦屋で生まれ育って、ずっとこれまでこの阪神間で生まれ育ったわけですが、現在の阪神間において、阪神間を感じ取れるものは何なのかと。私専門が都市計画あるいは建築ということをやっております、そのなかで現在、「昔は良かった」「昔はこんなものが残っていた」というものではなく、阪神間を感じられるものは何なのかということをやっと研究してきたわけです。特にそれは高校生の時に、芦屋から大阪の高校に行くことになったのですが、そこは船場の子弟がたくさんいるような学校で、まあ京都の街中から来ている人も多かったわけですが、そういうなかで、一体自分が生まれ育っている阪神間は何か考えるようになりました。先程河内先生が東京で説明する時にどうするか、心を砕いているとおっしゃっていましたが、私自身も、大阪京都にどう伝えるのかということをやっと考えていました。そこで、私自身の研究のなかで見つけたのが、博士論文となった六甲山麓の石垣についての研究です。いわゆる風化花崗岩ですね。この風化花崗岩という御影石というものを研究してきたわけですが、現在の阪

■

神間においては当たり前風景なわけですが。たくさんの建物がなくなっていったなかで、かろうじて六甲山の花崗岩で積まれた石垣だけは、今でも地域の風景を形成しているということで、非常に興味を持ったわけですが。実はこの阪神間モダニズム、今日たくさんの文学者、芸術家の名前が出てきましたけれども、谷崎潤一郎が阪神間に来て最初に書いた作品の中に出てくる地元の描写というのは、「土地が白い」ということなんですね。東京は関東ローム層で真っ黒ですよ。ところがそこから来た人にとっては土地が白い。先程出てきた遠藤周作も土地の色を不思議に思い、「異国の田舎のような風景を持っていた」と書いているわけですが。これは近代の文学者だけでなく、村上春樹もこの白いということを作品の中に書いているわけですが。

今日私はこの「美食空間から見た阪神間」ということをお話させていただくのですが、最初にこれまでやってきた研究を少しだけ紹介させていただきたいのですが、こういう風景ですね。私がこれまでに研究してきた花崗岩の風景、これ自身も実はたくさんの文学作品に出ているというだけでなく、今日少し河崎先生のところで小原流という名が出てきました。実はこのイベントに先立って、小原流のお家元にごへ来て頂いたことがあるのですが、もともと生け花小原流も六甲山麓や宝塚の植生から着想を得ていることを聞かせていただきました。風化花崗岩のバッドランドの矮小化した植生の表現ということですが、実は文学者達は盛んにこういう風景を描いているわけですが。

今回のシンポジウムの趣旨なんですけれども、少しずつ出てきましたが一番は、「阪神間モダニズムは終わっていない」ということです。現在、阪神間で阪神間モダニズムというと、戦前の「昔はよかった」というところが語られることが多いわけですが、実は阪神間では戦後に生け花小原流、あるいは具体美術というように、この地域から全国に発信されてきたものがある、まだ阪神間モダニズムは続いている、そういうようなことを今回の趣旨にしているわけですが。そういうなかで、このような花崗岩なども、阪神間モダニズムにも関係してきたといえます。今私たちがいる旧甲子園ホテルですが、これを設計した遠藤新の師匠のフランク・ロイド・ライトが芦屋で山邑邸を設計することで、遠藤新と阪神間に接点が出てきたわけですが、この山邑邸は建築評論家の藤森東大教授によると、この辺りの岩山をアリヅナとしてイメージしたということで、この阪神間の自然風土が、阪神間モダニズムの建築、文学、色々な事に反映しているのではないかという風に感じています。

もう一つ、私は現在の阪神間のなかで、阪神間を感じるものを都

■

市計画とか建築の視点で考えてきたなかで、出てきた研究がケーキの研究なわけです。私は現在、講演で呼ばれる時はわりとケーキの話が多くなっているわけですが、なぜこのケーキの研究を始めたかという、大阪・京都に対して阪神間で誇れるものということを考えて、高校生の時にベニールというドイツ菓子の店でアルバイトをしていたのですが、その時に感じたことは、リンツァーアウゲンという美味しいクッキーを全国に発送したい、この味を全国に伝えたいという地元の人達がたくさんおられることに気付きました。こんな小さな街の住宅街のケーキ屋さんから、全国にものが運ばれていく、そして地元に住んでいる人はこういうケーキさんに非常にアイデンティティを感じているということで、これはひとつ、このエリアの特徴じゃないかというのは、高校生の時から感じていたわけです。私の研究スタイルというのは、例えばこのノートには、365日毎日違う店でミルフィーユを食べたものを全部記録しています。毎年ひとつのケーキを決めて、365日別の店に行くという研究をしてきたわけです。ただケーキを食べているだけでなく、これはパリにいた時に365日食べたケーキ屋さんの立地を表しているのですが、赤の印はコーナーにあるお店を示しています。ケーキ屋さんというものが、街のなかでどういう存在になっているか。これは私が阪神間、芦屋に生まれ育って、芦屋でケーキを食べてきたなかで考えるようになったテーマなんですけれども、先程打合せをした際、河崎先生から味ということや美食、食というものが阪神間モダニズムのなかで非常に大事だとおっしゃっていただいたんです。ただ、味と言うのはなかなか記録に残せないから、伝えるのが難しいということをご指導いただきました。私はまさに、それを伝えるために空間であれば、ひょっとしたら伝えられるのではないかとということで、最近では美食空間と呼んでいます。皆さんはじめは何のことかと思われたと思いますが、美食空間ということを考えてみたいと思ったわけです。この美食空間というのは、私にとって、四つのレベルで考えているわけです。一つはお皿という空間ですね。そして次のレベルは、テーブルという空間です。その次はこうした建築レベルなんです。それからもう一つは、先程ミルフィーユを食べたパリの店の場所を示したものがありましたが、そういった食の場所が地域にどういった風景をもたらしているか、そういった四つの点からみて行こうとしているわけです。

それで私は、食というものを空間ということで分析しているんですが、最も影響を受けた一つというのは、『細雪』に載っている一文なんです。この『細雪』には、ドイツ人の家庭とロシア人の家庭が出てくるんですね。そして谷崎が、ロシア人の家庭に呼ばれて、食



■

べに行くシーンがあります。夙川に住んでいる白系ロシア人の方なんですが、そこには「うどんすき」ではなくウロンスキーという人も来ていました。このウロンスキーさんは地元ではニックネームがあって、すごく子どもが好きで、近所の子どもを集めて遊んでいたため「コドモスキー」と呼ばれていたそうです。まあ、そういう人達が集まっているところへ行って、「ロシア人はあんな小さな家にいたかて、お客すんのが好きや」という一文があるのです。小さな家であっても、家のなかで社交するのが外国人の人は好きなんだなということをここで知ったわけです。です所以我は、パリにいた時も芦屋にいる時も同じなんですけれども、ひたすら近所の人を家に呼んで、お好み焼きを作っふるまっています。1年間で100人以上の外国人に食べてもらったんですけど、こういうことをすると、逆に家に呼んでもらえるんです。私はこの5年間で30か国ほど調査にまわっているんですけど、妻が日本料理を作ってもてなしたりもしています。そうして次に家に呼んでもらうことで、色々な国の家庭を見られるんですね。家庭でどういう風に食事をしているか、ということで、中国やチュニジア、フランスとかイタリアとかで、こういうことをしながら食の空間というのは一体どういうものなのか、ということを探っているというのが今日のひとつのテーマである美食空間学ということなんです。私は芦屋で、私自身と全く同じ年齢の築50年のマンションに住んでいます。これこそ、谷崎が書いている文章のように、日本人の友達を呼ぶと「ようこんな古くて狭いところに住んでるな」と言われるのですが、近所の外国人の人は喜んでくれるんですよ。最近ではロシアの方が増えているので、まさに谷崎の『細雪』の世界にいるつもりになっているわけですが、こういう風に食の空間ということを研究しているわけです。

それで、繰り返し申し上げますけれど、この食の空間というのはあくまでもお皿の上、それからテーブル、それから建築、そして都市の空間という4つのレベルで考えていますが、私は最近、フランスで調査をしていて、非常に気になることがあります。最近のメインテーマはテーブルのサイズを測ることです。パリに住んでいた時、テーブルサイズは55cmでした。日本は平均75cmになります。国によってテーブルのサイズが違うんですね。それが気になって、その衝動にかられてこの5年間で25か国くらいまわって調査をしているんですけど、そういう調査と共に、お皿の中の空間ということを追っているところで、少し気になることがありまして、これはフランス料理でよく見かけるシーンだと思います。筆を使うという、そして筆でくると円を描くということなんですね。それでフランス人の研究者と議論しますと、これは書道の影響だと、そしてそれはひとつ

■

の定説になっているのです。ただ、私は河崎先生のお話を学生の時から勉強させてもらっているわけですが、なにかこれが吉原治良の円というか、果たしてフランス料理というものに書道からダイレクトにいったのか。あるいは河崎先生の話聞く度に、吉原治良という作家が藤田の影響を受けて、そういうなかで国際性という色んな、まあおそらくこれは実証もできないしわからないわけなんですけども、明らかにこのデザインは日本からフランスに伝わって今世界に広がっていているわけですが、これは書道からダイレクトなのか、あるいはそれ以外の方法なのか、非常に興味を持っているわけです。先程河内先生が仮説をたくさんとおっしゃったので、仮説ではなく、それこそ河崎先生に後で怒られると思うのですが、こうしたデザインが日本から広がっていているわけですが、少なからず墨の使い方は、あんまり日本では黒い墨を使うということは少ないですが、フランスではよく見られます。お皿のなかとこの話をしましたが、次にこの建築です。建築ということで美食空間を考え出したきっかけはまさにこの甲子園ホテルなわけです。私はこの『甲子園ホテル物語』という本を何年か前に、もう7年前になりますか書かせて頂いたわけですが、この本を購入頂いた方にまさきに怒られるのが、建築の本と思って買ったのに、書いてあることは食べるもんばかりじゃないか、と。一章はチョコレート、二章はすきやきということで、あんまり建築のことが書いてないのですが、なぜそういうことになったかと言いますと、この建築を研究するなかで、色々気付いてきたことがあります。これは甲子園ホテルのパンフレットですが、甲子園ホテルの当時のパンフレットを見ますと、例えばフランス語でターブルドットと書いてあったり、あるいはお昼ごはんのことをティフィンと呼んでるんですね。このティフィンというのは、今インドでカレーを入れるお弁当箱をティフィンと呼んだりするわけですが、そういったイギリス領で使っていた言葉なんかも随所にみられるわけです。

そしてこの甲子園ホテルですが、一体なぜこんな形になっているかということですが、なんと言っても目立つのは二つの塔ですね。この二つの塔にはどういう意味があるのかということ少し考えていきたいのです。私達はいま西ホールと呼ばれている場所にいます。ちょっと後ろを見ていただきたいのですが、ちょうど機材の置いてあるあの場所、皆さん何のスペースだったかわかりですか。あそこはオーケストラボックスなんですね。今現存する日本のホテルで、オーケストラボックスのあるところはほとんどないと思います。いわゆるオーケストラボックスがあって、私達が今座っているこのスペースがバンケットルーム、ボールルームでもあるわけです。この建物

はちょうど左右対称になっているのですが、皆さん見えますでしょうか。私達が今いる、現在の西ホールがバンケットホールであったのに対し、あちらの東にあるホールはメインダイニングでありました。そして、このバンケットルームのドアをあけて向こうのメインダイニングまで全部厨房なんです。厨房で出来たものを運んでくるというところなんですけれども、実はこのホテル、中心は何かというと、キッチンなんです。皆さんが今日玄関から入ってすぐにロビーがあったと思いますが、あそこは二階に位置していて、一階にあたる部分が全部厨房になっていました。この厨房はものすごく日当たりも良いんですよ。普通厨房というと、ホテルでは裏側とか地下とか、窓のない厨房が一般的だったわけです。この頃から世界のホテルの設計のなかで、中心は厨房だという議論が出てきました。ホテルの顔はメインダイニング、ホテルの心臓部は厨房だと。私はこの5年間で25か国ほどまわって世界のその国でメインとなるホテルを見てきましたが、なかなかそのようなホテルは残っていないですね。ど真ん中に厨房を作ると、そういうことで考えると、厨房を中心としたキッチンスタジアムというのですか。このホテルの非常に不幸だなと思う点は、設計した遠藤新の師匠のフランク・ロイド・ライトがあまりにも有名だったので、フランク・ロイド・ライトの弟子の作品と見られることが多いのですが、そもそもこのホテルがどうして出来たか。この建物はホテルなんですよ。だからホテルとしての面白さということをもう少し考えていかなければいけないなと思っています。

それで、このホテルですが、まさに厨房を中心にして、二つの塔は厨房からの煙抜きなんです。現在は垣根が育って見にくくなっているのですが、1階がすべて厨房になっていました。現在どういう状況かというと、図工室になっていますが、つい最近までは食物栄養学科が調理実習に使っていたのですけれど、非常に明るい場所です。私はこの本を書くにあたって、当時働いていたシェフの方にたくさんお話を伺ったのですけれど、厨房の思い出で真っ先に出ているのはいつもキャッチボールしていたと。雨が降ったらここで野球をしていた、それくらい広い厨房であったわけです。それで、料理の話聞きに行っているのに、出てくる話は野球の話ばかりです。ここに、当時のホテルの野球チームのユニフォーム姿の写真がありますが、打ち出の小槌が付いていますね。ホテルっていうのが誇りだったんですよ。それで打ち出の小槌が描かれています。ホテルが出来た当時の総料理長が鹿中英助という方なんですけど、この方どこから来たかということ、華族会館。皆さんご存知の鹿鳴館の建物は、帝国ホテルが出来た後、華族の方のための社交施設になっていたわけですね。その華族会館の総料理長が、この甲子園ホテルが出来た

■

時に赴任されたということで、当時日本のフランス料理では屈指の名シェフがこの料理長に就いたわけです。一方でベッカーチーフ、いわゆるシェフパティシエですね、これにはどこの国の方が就かれたか、大体皆さん想像がつかないと思います。まさに『細雪』を読んでいるとそこに出てくるのは、ドイツの方、ロシアの方ですよ。神戸では今のモロゾフさんとか、ゴンチャロフさんとか、そういった方が有名ですが、このホテルも最初のシェフパティシエは白系ロシア人の方なわけです。この阪神間は白系ロシア人の方が来られることで演劇、あるいは音楽、先ほど貴志康一さんの話が出ていましたが、そういう世界的な音楽家が育っていったところで、そこにロシアの方、ロシア革命の後亡命してきた方の影響でたくさんの文化が広がっていきました。まさにこの料理についても白系ロシア人の方の影響が非常に大きかったわけです。まわっていると野球の写真が本当にたくさん出てくるわけです。このユニフォームもちょうど打ち出の小槌ですね。白系ロシア人の初代パティシエはウーグルスさんという方で、2代目が林田さんという方になります。現在甲子園口の駅前にライト洋菓子店があります。フランク・ロイド・ライトのライトを取っていますが、この林田さんがライト洋菓子店を始められた方で、お孫さんからこの写真をいただきました。当時日本のホテルで、これほど陽当りのいい厨房はありません。またこのホテルは外から見ると、客室がどこにあるかわかりません。一体どこに客室があるんだ、と。これは客室を隠してつくっているということもあるんです。設計者は、このホテルは「住宅より短い廊下をつくらう」と考えていました。普通ホテルというと、長い廊下に客室が並んでいくわけですが、そういうホテルではなく、短い廊下でつくっていかうということで左右に分散させています。中心はなんといってもこれだけ大きな厨房と、メインダイニングとバンケットを持つということで、ここがいかにグルメに力を入れたホテルであるかがわかると思います。

他にもたくさん名物があります。このホテルには日本初というものがたくさんあるのですが、そのひとつにホテルで最初に和食を取り入れたということです。その和食は何かというと、パンフレットに「独特のスキヤキは四階日本座敷にて」とあるように、スキヤキルームというすき焼き専用の部屋を作っているわけです。ところがさすがにすき焼き専門の料理人はなくて、現在もあります京都の三嶋亭から毎日職人さんがお肉を持って来て、包丁を入れていくということでした。当時のフランス料理のシェフの方に聞いてみると、すき焼きの肉だけはやはりフランス料理シェフでは無理だったようです。

それからもうひとつ名物は「ホテル名物西洋菓子とチョコレート」。

これはもちろん、ゴンチャロフさんとかモロゾフさんが得意とするチョコレートですね、ロシアチョコレートというのがこのホテルの名物だったわけです。昭和5年3月のホテルオープニングの頃、高松宮ご夫妻が、神戸から新婚旅行に旅立たれる前日、お泊りになられたようなのですが、記録を見ているとこのホテルは、ヨーロッパまでいくら食べても足りるくらいのチョコレートを献上したと書かれています。

そういったように、非常にグルメホテルであったということがわかります。これはスキヤキルームの写真です。この部屋だけは今でも残っています。そしてこのホテルの空間を伝えるのに大事なと思うのは、正面玄関からメインダイニングの方へ行く途中、少し地下に降りたところにメインバーがあるところです。みなさん、ぜひ帰りに観て帰ってください。このバーというのがどういうところかというのは、フランス料理の仕組みを考えるとわかりやすいのですが、フランス人の場合、必ず食事の前に食前のアペリティフがあって、食後にディジェスティフ、食後酒があるわけですね。だからまずバーへ行って、食事のテーブルへ行く。私はフランス人の家庭は何十と家庭調査しているのでわかるのですが、食事に行くと、必ずソファで食前酒を1,2時間かけて、その後にテーブルに着く。テーブルに着くまで結構長いんですね。まあそういったような、フランス人の食事の方法に沿って、空間も配置されているということです。ですからホテルに入って、まずバーがあってそのとなりにメインダイニングに入って行くようになっていきます。世界のクラシックホテルをまわっていますと、必ずバーをぬけてからメインダイニングに入って行くようになっていきますが、このホテルもまさにそれに近い形なんです。つまり西洋料理のスタイルがそのまま建築になっているのです。私はたくさん日本のホテルも調査してきたわけですが、ここまで忠実に守られているホテルは少ないです。福岡にある西鉄グランドホテル、そこだけは同じような造りになっています。なんでかなと思ったら、西鉄グランドホテルの料理長はこの厨房出身なんですね。ですのである程度そういうことが反映されているのだと思います。

それで今日のテーマは、この阪神間を世界史とかグローバルなかでどう位置付けられるかということを考えていこうというのがひとつの目的ですけれども、阪神間モダニズムのなかで非常に大きな影響を与えたのがロシア革命なわけですね。この時に、ロシアの前衛芸術家や音楽家、演劇人などがたくさんこちらへ移ってきました。ここで色んな交流を行っていくということで、先程河内先生からも「えびす」という話がありましたけれども、まさにそうした外からくる文化と交流していくことによって、色んなアイデアが出てくる。例えば、

■

フランス料理にある円ですね、ああいったものも、色々な交流のなかからああいうデザインが出てきたのかなと思うのです。あと美食のなかで大事なのは、甲子園ホテルと共に美食のレストランとして有名だったのが、夙川にありました、パインクレストホテルというところ。ホテルの歴史の本で最も有名な『日本のホテル小史』という、村岡實さんという方が書かれた本があります。この村岡實さんはこの辺りご出身でして、子どもの頃にパインクレストホテルとこの甲子園ホテルで食事をしたことによって、ホテルの世界へとつながっていったように感じます。そういう方から見ても、日本の美食史のなかでパインクレストホテルと甲子園ホテルは特別な存在だということが本に書かれているわけですが、実は甲子園ホテルとパインクレストホテル、どちらも戦前でホテルは終わっているわけです。しかしここで働いていたシェフ達が戦後の日本のフランス料理を支えてきた方達なわけです。パインクレストホテルの当時の料理長は、ちょうど大阪万博の時にホテルプラザが朝日放送の横にできたわけですが、その「食のプラザ」と言われたあのホテルの初代料理長としても活躍されました。それから先程お話したライト洋菓子店もそうですが、厨房で活躍した料理人のなかで最も有名なのが西村修一さんです。戦後の料理オリンピックあるいは料理の世界大会などで、1970年代の終わりから80年代に、日本の選手団の団長、リーダーとして、日本を代表するフランス料理の料理長として活躍された方がいらっしゃるわけです。そういう意味で、阪神間という場所、これは戦前だけのものではないといえます。現在、阪神間モダニズムは「昔は良かった」というような戦前の郷土史的な扱いをされることが多いのですが、今日の河崎先生、河内先生の話にもありましたが、戦前のモダニズムの時代以降、そのモダニズムの時代に育った方々が前衛活花小原流、あるいは具体美術というものを世界に発信していて、河崎先生の話では「知らないのは日本人だけ」というようなことにもなっているわけです。また一方で、阪神間モダニズムを代表するような住宅地、香櫨園、甲子園、苦楽園、甲陽園。こういったところに戦後、ケーキ屋さんが建ち並んでいくわけですね。この非常に面白いところは、単に阪神間にケーキ屋さんが形成されたということだけでなく、80年代に入ると香櫨園、この香櫨園というのは現在阪神の香櫨園という駅が残っていますけれども、実際には阪急の夙川から北辺りまで含めたエリアが香櫨園と呼ばれていた、その香櫨園、苦楽園、甲陽園、あるいは甲子園といった、阪神間モダニズムの時代に出来た街が、これに岡本や芦屋も入るわけですが、ケーキ屋さんがあるというよりもケーキ屋さんが集積する街ということになっているわけです。私は阪神間で石とケーキ屋さんを研究してきたわけですが、石はも

■

ちろん今でも残っていますけれども、ケーキ屋さんも阪神間の美食の歴史のなかに位置付けられるものなのかなと思っています。それから、例えばアンリ・シャルパンティエというケーキ屋さんがありますけれど、この店は本当に前衛的というか活気的なのはお菓子じゃないんですよね。なぜ日本でこれだけケーキが受け入れられたかという、単に戦前にあった和菓子を食べる感覚で洋菓子を食べていたということで、あくまでもお茶といただくお菓子だったわけですが、アンリ・シャルパンティエの場合は最初からフランス料理のデザートということで展開していったのです。誰もやらない経営を考えるとということ言うと、阪神間モダニズムの流れを汲んでいるのかなと思います。

そしてもうひとつ、この美食空間・阪神間ということで考えたいのは、今西洋料理の話をしていただけですけど、この甲子園ホテル、パインクレストホテルが出来る時に、実は和食も阪神間で有名な店が出てくるわけですね。先程も少し話に出てきたかと思うのですが、播半やつるやといった大阪の有名なお店が甲陽園に出店してくるわけです。昭和5年というのは関西の美食史のなかで非常に大事な年です。吉兆さんが出来たのも昭和5年なんですね。神戸の花隈の料亭から息子さんが独立して大阪に吉兆を出すわけですが、大阪ではこの頃、浜作、板前割烹といった店が出来るわけです。和食のモダニズムというか、そういうものが大阪、阪神間で起こっていく。播半さんは本店では、日本で初めて料亭でテーブル席を作って、西洋風の洋館を作って、料亭が洋館でテーブルで懐石を出すという、和食のモダニズムも起こってきたわけです。昭和5年というのは、このホテルが出来ただけでなく、この大阪、阪神間のなかの美食史のなかで画期的な年なんだと思います。そういうなかで、阪神間の洋食だけでなく、和食というものも注目され、それにはなんとといっても播半ですね。私は学生の時、河崎先生に連れて行って頂いたのですが、廊下の壁に魯山人の皿がはられているというような、本当に美術館のようで、しかも建屋が敷地内に点在しているといったお店でした。今日何度も『細雪』を取り上げていますが、『細雪』のなかでも「芝居は雁治郎、料理は播半」と出てきます。この播半はもちろん、大阪の本店のことですけど、その本店も戦後、甲陽園に移っていくわけです。こういった阪神間モダニズムの時代に阪神間に出来た料亭が、戦後どうなっていくか。これを象徴するのが東京オリンピックのころに、アジアを代表する料理旅館として播半がライフという雑誌の表紙を飾っています。ライフの表紙を飾る、つまり外国人に受け入れられる、外国人に喜ばれるスタイルとして、阪神間モダニズムに出来た旅館が評価されているのです。実はこの旅館とホテル

は、実に深い関係にあって、この甲子園ホテルのモデルは日本旅館なんです。設立に関わり支配人であった林愛作という人は、日本のホテルは日本旅館に学ぶべきだ、西洋に視察に行く必要はないということ強く言及しているわけですね。日本の旅館の良さを空間にしたのがこのホテルなんです。だからこのホテルが戦後の日本旅館に影響を与えていることがひとつあります。今、日本で旅館に泊まると、和室の奥に必ずちょっとした応接セット、椅子とテーブルが置いてありますよね。あの空間は実はこのホテルがきっかけになったと言われています。このホテルの設計者の遠藤新は、和洋室というものを作っているわけです。そしてこれを応用したのが、長野県の笹屋ホテルというホテルです。日本旅館の革命のきっかけになったのが甲子園ホテルと言うことができます。東京オリンピックの時に播半がアジアを代表するものとして、あるいは大阪万博の時に食のプラザといわれるホテルが出来てくる。いずれも阪神間に深く関わってきているもので、阪神間モダニズムの時代に生まれたものが戦後も続いていったということであると思います。

私は今回、このシンポジウムの企画をさせて頂きましたが、阪神間モダニズムというものは戦前の単なる一時期のものではなく、現在もつながっているということを議論したいなと思っています。我々には見えていないものも、たくさんあると思いますが、甲陽園で美食空間的に非常に興味があるのは、播半さんの料理です。現在、JR西宮駅の近くに立峰さんという、当時の播半の料理が手頃にお昼に食べられるのですが、私はこの10年ほど、毎年学生にレクチャーをして頂きながら、当時の料理を再現して頂き、それを記録しています。播半さんの料理の特徴というのは、まさに料理を風景としてデザインしていくというようなところで、金沢兼六園にあるにあるような雪囲いみたいなものであったり、田毎の月、田んぼに映る月ですね。えびすさんの料理などもあります。そういったものを表現した料理を分析しているわけですが、私の美食空間学的に非常に興味があるのが、この播半さんの風景のデザインですね。橋をかけて建物を点在させて風景を造っていくと。実は今これをケーキ屋さんがやっているんですよ。同じ甲陽園のツマガリさんです。ツマガリさんが今どんなことをやっているかという、あの甲陽園の街を比叡山に見立てているわけです。どういうことかと言いますと、ツマガリさんの本店がありますけれど、本店は今までに坪あたりの売上日本一になったこともあるといわれている店です。ここは階段を下りていく、外から見たらあまり目立たない、わからないようなお店ですよ。どうやって店舗を拡大しているのか。普通は大きくなって儲かっていくと建物をビル化していきますよね。ツマガリさんはビル化せずに色んなところにア





トリエをつくっています。ギフトプランニングセンター、ラッピングルームと点在させているわけです。ツマガリさんに言わせると、これは比叡山をつくりたいということなんです。つまり、宿坊があって、その宿坊のまわりを点在する僧のごとく、シェフが行き交う。ケーキづくりは風景づくりだとおっしゃっているわけですが、現在関西でも有名なエス・コヤマさんが三田でお店をやっていますよね。あれのモデルはまさにこれなんですね。食ということを通して風景をデザインしていくというこういう手法もまた、阪神間から生まれて、阪神間から広がっていったということ、今日はこの美食空間というこの四つの視点で話をしてきたわけですが、このお皿の中とかテーブルとか建築とか、そういうところから見ると阪神間モダニズムの時代の料理というのはなかなか再現しにくいのですが、空間ということで読み解くと、何か読み解けるものがあるんじゃないかと考えています。播半さんはなくなったけれども、この子孫さんですね。この三つ星のレストランがちゃんと阪神間モダニズムの場所には今もある、というところで、この美食ということ、この阪神間の研究についてはこれも河崎先生が美術館におられる時に監修した『阪神間モダニズム』という本がありますが、ここのなかでまだ食のところが書かれていないのです。ですので、少し食ということも付け加えながら阪神間モダニズムは現在にもつながっているんじゃないかということを考えていきたいと思っています。これを含めて、この後のパネルディスカッションをしていきたいと思っています。乱雑な話になりましたが、今日はたくさんお集りいただきまして、本当にありがとうございました。

# 2

## ■ パネルディスカッション ■



**国吉：** それでは、第二部を始めさせていただきます。パネルディスカッションには河内厚郎先生、河崎晃一先生に引き続きご登壇いただきまして、進行を生活美学研究所の三宅正弘先生が務めてくださいます。それでは先生方、よろしくお願いいたします。

**三宅：** ありがとうございます。よろしくお願いいたします。本当にこの阪神間モダニズムというのは、この研究所で創設当時からずっと続けてきたテーマです。ところが最近少し油断をしている間に世の中がすごく変わってきたなと思いますのが、今授業なんかで学生に阪神間ってわかりますか、とか阪神間モダニズムってご存知ですかと聞くと、なかなか知っている方が少なくなって、とうとう学生のなかでも阪神間という言葉自体がなくなってきている。そういう時代にきたということを強く、学生と接して感じています。そんななかで、阪神間モダニズムということを、この研究所で永年取り組んでいるだけに、これは言い続けなければいけない。そして実際にこの阪神間モダニズムという言葉をつくられて、引っ張ってこられた河内厚郎先生、河崎晃一先生に、まずはこの阪神間ってどうだったのか、それとこれからの話をしていかなければいけないということで、お話をじっくり聞いていきたいと思います。これまでの話は、色んなところで行われてきたと思うのですが、今回は「これまで」ではなく、「これから」の話を考えていきたいと思います。それではまず、この阪神間モダニズムという言葉を造られた河内先生から、今日のシンポジウムに際して、先程のお話のなかでは10%も言い切れていないと思うのですが、まず今日のこの3人の議論と、先生の言い残した部分を含めてお話頂きたいと思います。お願いします。

**河内：** いや、まあ外にわかってもらうにはあざとい宣伝力があるので、例えばその、スターをつくらなければいけませんね。今日はいらっシャっていないけれども、小原流の若家元。なかなか華のある人らしいので、こういう人を活用していったほうが良いと思います

ね。スターを出すことですね。三宅先生もですね、実は昔阪神電車に乗ってまして、特急で座れないので各停でいてまして。すると武庫之荘辺りで突然、青年が近づいて着まして、それが三宅先生だったんです。おどおどと恥ずかしそうに、厚かましくしゃべってくる人で。結局どこでも話しかけてくる人で、話しているうちに、ああこの人は阪神間モダニズムに興味持ってるなとわかったんですね。それからずっとお付き合いが続いているわけですが、そういう人をどんどん増やしていかないといけない。

**三宅：**なんか先程、梅棹先生を追っかけていたっていうことをおっしゃっていましたが、私も追っかけていたということなんですかね。

**河内：**ありがとうございます。結局人なんで、漠然と抽象的に系統立っていくものじゃないので、やっぱり人なんです。スターが何人か出れば、バツと変わっていくので、今度また甲南大学が100周年を迎えるそうなので、そういったなかから人材をスカウトしていきたいですね。本当に、プロデュースしたいです。

**三宅：**あの、小原宏貴お家元ですが、これに先立ってここで話して頂いたことがあるのですが、日本には生け花で三大家元があると。池坊、草月、小原流と。それで池坊は京都ですよ。京都に伝統流派の一派があるというのは当たり前なのですが、その次草月流、これも首都東京なので当たり前なだけけれども、三つ目の小原流は阪神間にあると。つまり三大家元のひとつが阪神間にあるということ自体が、この阪神間の力ではないかということ、ここでおっしゃっていました。

**河内：**あのね、同じようなことを言えるのがね、古典芸能の狂言の世界です。東京は野村家です。京都が茂山家。阪神間は善竹家というのがありまして、善竹弥五郎という狂言で最初に人間国宝になった、そういう一派があるのですが、そういうことを阪神間ではあまり言わないのは勿体ないですよ。

**質問者 1：**阪神間のどこにあるんですか？

**三宅：**東灘区です。

**河内：**小原流は御影です。関西ではもうひとつ、未生流という大きな流派があって、これは事務局、本部は大阪ですが、阪神間の人

■

多いので、家元も確か阪神間に住んでおられると思いますけれども、二つも大きな流派があるんですよ。

**三宅：**まさにその未生流の肥原さんも小原さんも甲南ボーイで、河崎先生の後輩ですよ。そういうたくさん優秀な後輩方に向けてコメントいただければと思います。

**河崎：**先程ご質問の方、阪神間はどこにあるのですか、とおっしゃったのでしょうか。

**質問者 1：**いえ、小原流がどこにあるのかと。

**河崎：**小原流ですか。場所的には阪急御影駅のすぐ北側です。坂を甲南病院へ上っていく途中ですね。あそこがもともとの本拠地で、現在、東京の青山通りのところになります。それで、今日お話しさせて頂きまして、駆け足だったんですけども、阪神間モダニズムの原点と、具体を通じて阪神間文化のこれからということをお話させて頂いたのですけれども、間に「阪神間モダニズム展」という97年に企画した展覧会なんですけれども。実は正直申しまして今、将来的にどういう風なというような話なんですけれども、先程のレジュメを見て頂いたらわかるように、戦前の50年、戦後の50年なんですよ。あの当時なんですけれども、今はそういう気持ちはあまりないのですけれども、事実であることは確かなんです。実はあの時の展覧会の僕自身個人的に思ってきた裏側の嫌味は、戦前の50年で築き上げてきた文化を戦後の50年で食いつぶしてきたという発想だったんです。それを言っていたら見事に、文化だけじゃなしに阪神淡路大震災で建物も全て潰れてしまった、ちょうど50年で。非常に、全く個人的ですけど因縁を感じて、築き上げるのも50年だけど、50年経ったら一瞬にして無くなるというか。でも、文化というのは建物とか本とか、モノで残るものだけではありません。やはり人間の気持ちとか生活様式、そういったもの全てに築き上げてきたものですから。それで文化というものはその時代時代にあるわけで、時代が変わるともちろん歴史的に引き継いでいくものはありますけれども、全く新しいものが生まれても当然のことだと思います。今ここにいる方々、聞きにこられている方々には程遠い、スマホ文化というのは、今ここにお手伝いに来られている学生の方々にしてみれば当然のことです。あと20年、30年、50年と生きていかれたら、「ああ、学生の頃、ああいう風にスマホが流行っていたな」と。多分50年経ったらもっと進んでいるでしょうし。我々



の世代にしたら、「これどうやって設定するの」「どっか変なとこ触ったら全部消えてしまった」とか、その世界です。おそらくそれがわかりやすい文化の積み重ねだろうと思います。ですから阪神間モダニズムというのは、我々世代から戦後の流れを知っている人間、たとえここ30年、40年のことであっても知っている人間と、20歳前後の学生さんが知っていることが全く違うのは当然のことです。学生に、じゃあスマホいじって教えてちょうだいって言われたら、お我々世代の大方の人が「そんなもんできへん」という答えになりますよね。だから、そういう意味でどんどん変わっていくけれども、精神的な根底的なことをいかに伝えるかというのは、我々レベルの、まあ研究者とは僕、自分ではよう言わないんですけど、僕自身はとにかく資料を揃えて研究者に提供するという立場に立ちたいという、いわゆる前衛ですね。前に切り開いていくという、資料を集めていくという、それに徹したいという気持ちがあるんですけども、ここにいらっしゃる、阪神間モダニズムという言葉に反応される方々が役割を担っていると言いますか。そういう言葉じゃないかなという風に思っています。そういう意味で、1995年からもう20年以上経っています。その時代において新たに昔のことを歴史を紐解きながら、新しい阪神間モダニズムを見つけ出していく、産み出していくということが非常に大切なことで、100年前になかったことが当然あってくると思うのですね。そういうことを考えながら、次世代に伝えていくということが大事なことじゃないかなと思います。それから一つだけ訂正させてください。先程三宅さんが播半へ僕が連れて行ったと話しましたが、これは下見に連れて行ったのであって、食事に連れて行ったものではありませんのでそこだけ。それともうひとつ加えるならば、播半の廊下に魯山人がかかっていることでしたが、もちろん代々伝わってきたものなのかもしれませんが、実は播半の息子さんというのは美術評論家だったんですね。ですから、美術には非常に長けた料亭と言いますか、そういう存在であった。それで聞くとところによると、播半の昔の先代の女将さんは、「味のわからないものに美しさがわかるはずがない」とおっしゃっていたということですが、これはすごく妙に言い当てていて、逆もそうで美がわからないものは味もわからない。そういう意味で、美も味もなかなか伝えていくということは、時代によって違ってくるということもやっぱり頭の中になくってはならない。いくら美術評論家が美術を論じても、その時代時代によって違ってあるものがある。今の時代でしたらスマホで皆写真を撮りますよね。昔なら写真禁止、美術館ではしゃべってもいけない、というような時代もありましたが、今は世界中の流れとして写真を撮っていい、ゴッホであれ誰であれ、

■

常設であれば撮っていい。それから話もしていい、大声で走り回らない限りは。そういう時代になってきていますから。食べ物屋さんでも、これだけ街中にたくさんのお店があって、「美味しい」「不味い」というのは我々が判断することですし、そういう意味では、その時代に合った文化というものを産み出していかないと、という感じがするんですね。

**三宅：**ありがとうございます。少し播半さんの話が出ましたけれども、河内先生、あそこには現代美術のコレクションも、魯山人のコレクションだけでなく、伝統的な古典的なものだけでも、かなり新しいものがあつたっていうこともあるんですか。

**河内：**ええ、あの有名な庭がありましたよね。現代美術も展示していましたから。風光明媚な場所です。もともと播半は大阪の心齋橋北詰だったかな、開業していたわけですが、明治の時代に日本で初めてテーブルを入れた料亭なんですよ。和風料亭なのにテーブルを入れた。大阪時代から、伝統を引き継ぎながらちょっと新しいことをするという傾向があつたんです。それが支店を甲陽園に出されたんだけど、戦争で本店が焼けてしまったので、戦後甲陽園が本店になったのです。もともとそういう人達が阪神間モダニズムを作ってきたという流れだと思います。

**三宅：**そういう新しいものが生まれる時に、そういうコミュニケーションの場というものがたくさんあつたのかなと思うのは、河崎先生のお話の中でも、小原流も具体と少し関係しているということをおっしゃっていたように思うのですが。

**河崎：**そうですね。おそらく吉原治良と先代の小原豊雲家元ですね、お二人が出会われたのが戦後になってからじゃないかと。まあ戦前から芦屋と御影ですから、近いので色んな集まりで顔を合わせて知り合いではあつたと思いますが。先程お見せした1955年の真夏に開かれた野外展、芦屋公園で開かれた野外展に小原豊雲さんが観に来ているのは間違いのないです。その時に、これは具体のメンバーからお聞きした話なんですけれども、小原豊雲さんが、「こういう面白いことをやっていくのなら、東京でやったらどうだ」と、それで「東京で場所がなかったら、青山にある小原会館をいつでも提供する」ということで、野外展は7月の末に開かれて、そこから小原会館で第一回具体展というのが開かれたのがその年の10月なんですよ。わずか2か月ちょっとで東京での展覧会が実現した。これ

■

はもう小原豊雲さんの影響以外の何物でもないと言えます。中庭に泥を持ち込んで、そこで暴れまわるといふようなことも、普通お花の、お花じゃなくても普通のビルの中庭で泥を持ち込むって言ったら、それだけはやめてくれと言われると思うのですが。やはりそのあたり、小原豊雲さんというのは心が開けた、新しいものが目指しておられた方じゃないかなと思います。それから3回くらい、東京での展覧会は小原会館でやってこられていますね。

**三宅：**なんか、言葉は悪いですけども、一種の阪神間モダニズムの出張所のような機能が、東京にもあって、そういう発信というネットワークがまだしっかりとあった時代ということですかね。

**河崎：**発信の場所があったというのはいいんですけども、東京の展覧会を観に行く美術関係者には全く無視された。極端な言い方は「ブルジョアの遊びである」といふようなことです。そして阪神間モダニズム自体が、まあ今はもうそんな言葉は消えましたが、ブルジョアプロレタリアと呼ばれた時代の、ブルジョアだけのことであると。実際に阪神間モダニズムの展覧会やった当時も、聞こえてきた言葉には、阪神間モダニズムを形成した富裕層が西宮芦屋を中心に引っ越していったのは、まあ富裕層といふのはもともと大阪で店をやっていて、そこに同居していたのが店を広げるにあたって、従業員住み込みですからね、当時は。そういう人達に場所を与えるために自分達が出て行って、阪神間に家を建て生活していくことなんですけども、はっきり言った人がおられるのは、当時大阪は工業が盛んになって、尼崎とか今でいう此花区とか、いわゆる工業地帯になって煙がどんどん出て空気が悪くなった。それで外に出られる人は良かったけれども、やっぱりいわゆる貧困層といわれる底辺の方々は、その場に住まざるを得なかったということ。それが阪神間モダニズムへの生活環境に対するかなりするどい批判だなというのを当時展覧会やった時に聞こえてきて感じた記憶がありますし、これは歴史的に見てある一部なので、それじゃあその逆、大阪にずっと住んでいた人達はどのような文化を持っていたかということ、どういう風に展覧会にしていくかということ、これはまあ、はっきり言って我々の仕事、阪神間の美術館にいるからこそ、我々の仕事であって、そうではないということで、まあ切り捨てたと言ったら失礼なんですけど、そういう状況だったことを記憶しております。

**三宅：**はい、少し大阪との関係ということも出てきたわけなんですけども、冒頭で所長から大阪万博の話が出てきましたが、もう一

■

度世界に発信するひとつのチャンスが出来たわけですが、その時に河内先生が最初に橋爪節也さんの大阪モダニズムっていう話が出ていましたが、これは大阪モダニズムに放っておいたら取られるかもしれないわけですよね。あるいは、神戸は神戸で発信していくかもしれないなかで、この阪神間は次の発信に向けてどういう展開があり得るかっていうことは、何かご提案ありますでしょうか。

**河内：**大阪万博がどんな風になるのか、想像もつかないので、橋爪さんがおっしゃったのは、阪神間もそうだし、堺の浜寺とか帝塚山もそうだし、八尾の山本とかそれから千里山とかいっぱいある。ただそのなかで阪神間が圧倒的に大きかったので、エリアが。人も多かった。だから本来は大阪モダニズムなんだ、とそういう意味なんですけど、70年の万博でも具体の人がある程度活躍しましたけれども、それなりに意義があったと思うんだけど、私が高校3年の時で、正直言って未だに橋爪節也さんの弟の橋爪紳也さんとか、ああいう世代の人々が懐かしんでしゃべっているのを聞いて「ええ？」と思うんです。歳も違いますけど、私そんなにインパクトなかったんですよ。2回しか行っていませんし。あの世代になると、何回行ったかを自慢し合っている。僕はあの時ね、言ったら怒られるけどね、大阪は田舎だなと思ったのが、「外人見るの初めてだった」と。阪神間ってそんなことなかったですよ。私らはいとこが外人と結婚しているし、ですから住空間としては阪神間のほうが非常に都会的になっていたというのは、これは嫌味なことですが事実なんです。しかし、あの頃の日本人にとったらそういうことだったんだなと思って。そういう意味では住空間としたら我々は進んだところにいたんだなということを痛感しました。だから万博はそんなに言うほどインパクトなかった。

**河崎：**今の話の流れでちょっと思い出したんですが、阪神間モダニズム展の冒頭の文章を小松左京さんに書いて頂きました。小松左京さんは西宮のご出身なんですね。そこから京都大学へ行かれたのですけれども、京都大学へ入った時にハンバーグを食べる時にハンバーグを知らない人がいたと。昭和14年くらいの話です。ハンバーグを知らない同級生がいたそうです。逆に言うと夙川の駅の割と近所だったとおっしゃっていましたから、先程のお話にあったパインクレストというホテルとか、もちろん甲子園ホテルもですし、ハンバーグがメニューにあったんでしょうね。それからお花なんかでも、シクラメンとかあんなのはもう大正時代から夙川のほうに大きなお花屋さんがあって扱っていたようですね。そういう意味で、我々が



■

考えている以上に海外のものが入ってきていた。そういう時代でしたし、もうひとつは先程から河内さんがおっしゃっているように、日本のものも非常に大切にしておられた。展覧会の時に色々なお家を見せていただきましたが、本館は洋風でテーブル、椅子、それからお手洗いなんかも洋式で、「これはオリジナルですか」と尋ねたら「オリジナルです」ということでした。お風呂場も現在よりもオシャレな、脚付きの水流しがないものですよね。ドボンとつかるお風呂ですよ、外国製の。それが置いてある。でも庭先にはちゃんと茶室がある。そういうような生活様式を組まれているというのは、やはり日本の伝統的な部分というのを決して忘れていない、西洋一辺倒にはなっていないというような様式でした。それと先程言われていた大阪モダニズムというのはわかるけれども、それは大阪は大阪のモダニズムですし、大阪を本拠地として阪神間に来られた方々というのは、生活の環境を移して来られたわけで、やっぱり仕事の本拠地は大阪で、商売ですから儲からなければならない。そしてその儲かったお金で自分達の好み、あるいは文化を造りあげていくということで話は解決できるというか、やっぱり商売というのはいつかは絶たれる。倒産や名前が変わっていく会社がたくさんある。でも生活様式とか根本的なものは、いわゆるその家系といいますか、代々受け継がれていくこともあるんじゃないかなと思いますけれども。

**三宅：**はい。これからという話をしていたのですけれども、先程質問がありまして、今日は初めての方もいらっしゃるようで、一体阪神間モダニズムって何なのかという質問もあったわけですがけれども、今、和洋の話が河崎先生から出てきましたけれど、ちょっと皆さん、この建物の後ろを見ていただいて、欄間があって行灯のようなランプがありますよね。それから天井が障子のようになっていますね。この建築は洋風の建築なんですけれども、至る所にシンボルマークの打ち出の小槌がある。かなり伝統的な和の要素を取り入れているという、まさにこの阪神間モダニズムを象徴するような気がするわけですがけれども、少し質問にあった、阪神間モダニズムとは何かというのを、今日のお土産で持って帰ってもらうために、一言ずつで教えて頂ければと思うのですが。河内先生いかがでしょうか。

**河内：**まあ和洋折衷と言うと、継ぎ接ぎみたいなイメージがあるんですけど、一番それがうまくいった地域であることは事実で、ヴォーリズの建築なんかは本当に阪神間の松林とか土の色にすごく合っているんですよね。ものすごく日本人が好きな建築じゃないですか。ヴォーリズは本当に自然で、もう日本的と言っていいくらい、そん

■

な気がするんですね。ですから関西学院とか神戸女学院の建物が有名です。このライト様式の建物も震災の時にシャンデリアは落ちましたけれど、よくぞ残ってくれたなという感じですね。今となってはこれが阪神間の神殿と言っているんじゃないですか。私、子どもの時に自転車で乗れるようになって、阪神間を自転車で乗り回していて驚いたのが二つあって、一つは深江文化村というところで、これは芦屋から東灘に入ったところなんですけど、その頃はまだ洋館が十何件並んでいて、真ん中にヤードがあって、不思議な空間でした。そこは朝比奈隆とか音楽家がたくさんやってきた。ロシアから亡命した音楽家が住んだところであるとわかったんですが、もう一つがこの建物で、当時まだ整備されていなかったのに、本当にフランス人が密林の中にアンコールワットを発見したような、鬱蒼としたなかに、なんか不思議な不思議な建物があって。これは単に西洋風でもないしね。びっくりした記憶があります。ですから、よくぞ残ってくれたなと思います。だからそういった文化の混合が一番うまくいった地域ですね。

**三宅：**それでこのモダニズムという時に、モダニズムの解釈ですね。伝統の創造であったり、いわゆる阪神間モダニズムで使っているモダニズムというのは、フランスなんかで使っているモダニズムとどこか違っていてもいいのかもしれないのですが、どういうことがこの阪神間にはピタッとハマるのでしょうか。

**河内：**ヨーロッパなんかでも、定義が難しく、非常に移り変わっていく新しいものと、それから移り変わらない不動のもの両方を含んでいるという意味があって、ボードレールなんかが使った時もそういう意味合いがあったので、古いテーマを新しいデザインで出していくというか。それに関しては比較的阪神間もそうで、白鶴美術館が個人美術館の先駆けですけども、あれは昭和の正倉院が売り文句。それから昭和の源氏物語が『細雪』って言われていましたし、宝塚のスターの名前も最初は百人一首から春日野八千代とか取りましたよね。それから町名も、この甲子園辺りの近くでも、中世の和歌詩集から取った名前とか、夙川も芦屋も古典的な名前、公光町とか色々付けていますよね。あれはやっぱり、そういう意識があったんじゃないですか。そういう古典的なものを新しいデザインに活かしたい、そういうものが割合、滑稽じゃなくいった地域なんですよ。

**三宅：**河崎先生、これはまあ先生自身のご意見と共に、美術・アートの専門家として、どちらも聞かせて頂けたらと思います。



**河崎**：非常に難しい、何かと言われるとアバウトであるから永く言い伝えられているんじゃないかと、これが決め打ちだったらその時代で終わってしまっているんじゃないかと思うのですよね。非常にあやふやな、逆に言うとなごく日本的な、西洋の文化を取り入れながら日本の文化を融合させていく。まさに今それを融合させていく、次の時代を築く時だと思うんですけども。日本の文化ってそうですね、最近よく海外からたくさんの人が来て、日本文化、日本文化言ってますけれど、どれ見ても中国からの影響、韓国からの影響。当然後から来たものであるとか、明治時代以降はもう、ややそのパーセンテージが西洋に振り切ったという。そういう時代ですと来ている。それと同じことを今、我々は真ただ中に、歴史で勉強するんでなしに現代として真ただ中にいるんじゃないか。だからわかりにくい。歴史は過去ですから。もう決定していて、時代は動かないですから、非常にわかりやすい。だから美術なんかでも、過去の中世のヨーロッパ絵画、日本でも古いところというのは、見やすいですね。見やすいし、答えがはっきり出てくるんで。これはこういうものを描いて、この時代はこういう背景だったというのは、はっきり出てくるんで、非常に見る人にわかりやすい。それで僕なんかはどちらかと言うと、好み的には現代美術と呼ばれる今の美術のほうが好きなんですけれども、そういうのって非常にあやふやとか、誰も判定していないものを自分の目で見て判定しなきゃいけないということ。これは日本人が一番苦手なことじゃないかと思うのですよね。それと一緒に、阪神間モダニズムというもの、「これが阪神間モダニズムなのだ」というのは、まだまだ、まあ後100年。200年くらい前にそういうのがあって、100年位前にそういうのが検証されて、今の時代があるという日がやってくるというのが流れじゃないかというように僕は思っています。非常に逃げ般的な意見ではあるけれども、事実歴史というのはずっと見ていくと、そんな感じで生まれてきている。たまたま時代が経っているから、昔のことは正しいみたいに言われるけれども、これがたまたま残ったものであって、だから阪神間モダニズムが何かと言われると、まさに我々の、ここに住んでいる人達の生活様式。東京では味わえないです。地方、京都でも味わえないし、九州でもどこでも味わえない。それで身をもって感じていること。身体で感じる、目で感じる、いわゆる五感で、毎日の生活のなかで。電車乗って通勤することからはじまって、毎日の買い物をスーパーマーケットに行くことも、全てそこで、その地域というものを感じながら、よそへ行くあるいはよそから、よそって言うと変な言い方ですけど、他の地域から引っ越して来た人とか、こちらから他の地域に引っ越して行く

たりして初めてわかる。これは比較の問題だと思うのですが、先程のハンバーグの話じゃないが、そのようなことがまだまだしばらく続くし、それを見つけ出した時に阪神間モダニズムが何かというのは、それぞれの個人がわかるというものじゃないかなと思います。

**河内：**ですから、アートを産み出すとか、そういうことを今度とも続けて行きたいんだけど、さっきも言いましたように「阪神間ウェイ・オブ・ライフ」というのが本当は「阪神間モダニズム」なんですよ。たぶん、他の地域へ行ったらですね、やっぱりここは住心地が良かったと皆思っているんで、それをうまく分析はしていないかもしれないですが、居心地の良さとか。たぶんそれは「柔らかな個人主義」とかですね、本当は消費者としての生活空間なんです。これが非常に充実している。一方でアートでは結構先鋭的なもの、とんがったものが出たと、そのへんしか今のところ言えないですよ。

**三宅：**あともうひとつ、今後に向けて整理しておきたいことがあるのですが、それは芸術とかアートが自由であることからすると、いみじくも河崎先生が「阪神間」と言わずに「ここ」という言葉だけで語られたのですが、阪神間ということ限定してしまったり、地名をつけることってというのは先生から見ると少し抵抗があるし、阪神間っていうことで見ること、先生はアーティストでもあるわけですが、どうなのでしょう。阪神間と地域を限定してしまうことは、今後の創造の妨げになるのでしょうか。

**河崎：**変なことを思い出したんですけども、平成の大合併というのがありましたよね。あの時に芦屋の西宮が合併するという話がチラッと出たんですよ。芦屋が申し出て西宮に断られた、これは全く未確認の話なんです。その時に地名が何になるのかと言ったら、僕は絶対「阪神市」になると思ったんですね。阪神市西宮区、阪神市芦屋区、そういう名前しかないなという感じが自分で勝手にして、面白いなと勝手に見ていたんですけども。やっぱり今「阪神」というと、県の枠でいうと三田まで入りますから。縦枠と横枠と両方でいっている、ただ横枠は大阪湾があるんで切られていますけれども、幅でいうと須磨まで入れるという考え方もありますし、東は尼崎、北は三田というような地域なんですけれども、やっぱりなんというか摂津の国といいますか、兵庫県自体が昔は五つの国、摂津・淡路・但馬・丹波・播磨で出来ていたわけですが、ユナイテッド・ステイツ・オブ・ヒョウゴだと思うんですね。それぞれの地域で個性があれば、その地域を一つとして見る。兵庫県はひとつとして見

■

られています。丹波なんかは兵庫県からも京都のほうへはみ出している地域もあります。そういう意味では阪神間というのは、枠組みを持って語られるものではなくて、やっぱりさっきも言いましたように、あやふやで、大体僕らもそれで逃げて行くんですけども、そういう表現がいいんじゃないかと思います。あんまり決めつけて語ると自分で自分の首を絞めるようなものですから。ここが違うとか、あそこが離れているとか。

**三宅：**まあ、そういうボーダーを付ける、色んなナショナリズムの問題とか、こういうボーダーとか枠組みとかいうのは、本当に現代的な課題なんだと思うのですけれども、そういうことに対しても緩やかな領域、阪神間という「間」のもつ意味というのが実はあるのかなという気がします。

**河内：**あのね、去年か今年の正月に、BHKのBSプレミアムで『平成細雪』というドラマがありました。あれわりと面白くてですね、もちろん船場も入っているんですよ、北船場。帝塚山もちょっと出てきて、西は須磨くらいまで、それで芦屋、西宮。あれは『細雪』の皮肉な味わいをうまく現代に活かして、しかも阪神大震災の直前で終わるというね、あの感じ。だから場合によっては大阪市内でも阪神間にひっかかることもあるというか、そういう感じなんですよ。あれはなかなかよく出来たドラマだと思うので。それから、物語は再生産されていっているの、震災以降に阪神間に移り住んできた小川洋子さんという作家がいて、もう今は芥川賞の選考委員をされていますが、この人が書いた『ミーナの行進』とかですね、芦屋を舞台にした小説を書かれて、大変評価も高いし、街はだいぶインフラが変わってしまったけれど、物語は再生産されていっているんです。特に今、阪神大震災を使った阪神間のドラマというのが朝ドラなどに出てきていますから。それから『あさが来た』って先年人気があったドラマ、あれも最後阪神間で終わるのですけれども、やっぱりああいう人間のドラマは続いていくのでね。まあ、私は評論家なんですね。だからわりと分類して適当なこと言ってるわけです。河崎先生の場合、造るアーティストでもあるからね、わりとこう、ぱったり分類したりしない。しかも、河崎先生の場合には本当のブルジョアですからね。私はブルジョアじゃなかったからね、客観的むしろ憧れでしゃべるくせがついています。

**三宅：**河崎先生はご自宅によく有名人が来られていたと。

■

**河内：**こういう話はしたがないでしょ。ブルジョアなんです。したがるのはブルジョアじゃない証拠なんです。

**三宅：**はい、ではこれで、少し質問がありました阪神間モダニズムとは、これからのモダニズムとはということのベースの議論が出来たわけですけども、ここで最後に先生方から、これからの阪神間へ向けての提案を頂く前に、会場からコメントあるいは質問がございましたら伺いたいと思います。

**質問者 2：**東京から来た人が、山の方が家が多いと言っていたんですけど、暮らしやすくて皆集まってきたのでしょうか。要するに、東京の方では山の方に家が多いというのはあんまりないみたいなんです。

**河崎：**山がないから。

**質問者 2：**いや、山がないとかではなく、あるところはあるでしょうが、あまり家を建てるということはないから。

**河崎：**さっきちらっと言いかけてましたが、皆さん大阪から車でとか、JRとかでも、IR西宮駅ですとか、湾岸線とかの高速道路の西宮のランプ回りというのは、車がどっち向いて走っているかわかりますか。西じゃないんですね、北西からやや北北西よりなんです。それでちょうど今ある夙川の…夙川学院じゃなくて、下にある、あそこの回りで大きく左にカーブするんですね、JRが。あれでやっとなら六甲山と平行になるんです。平行になってからはご承知のように、六甲山の麓から海辺までというのは2kmあるかないかですね。それで、その間で家を詰めて行こうと思えば、山に登るしかないんですね。そして山に登り切ったんで海のほうへ行く。そういう風に僕は考えています。だから、山沿いに家が多いというのはそういうことですし、六甲のあたり行ってみると、こんな高いところまで、坂の上に家を建てるんかと思うんですけど、やはりそのあたりは住宅開発の最後の手段ですし、さっきから1930年と言う話が出ていますが、芦屋の有名な六麓荘というのが出来たのがまさにその年なんですけれども、あそこは今見るとそんなに高くないですけど、当時としては一番高いくらいの地域なんですね。市内というか、街中から見ると。そういう意味での、開発出来る土地を求めて行ったと考えるといいんじゃないかと思いますが。

■

**三宅：**では次の方をお聞きしてください。

**質問者 3：**質問というか、ちょっと違うかもしれないのですが、私は昭和一桁生まれの、船場のあほボンの成れの果てかもしれませんが、ちょうど先生のお話を聞いていて確かに思うのには、モボ・モガという言葉がございます。旧精道村に住んでいたのは昭和16年まで、3年余だったと思うのですが、しかし今でも憶えているのが、大阪の堺筋の近所で生まれ育って、大阪の生活と精道村の生活は全然違いました。食事の話がありましたけれど、お家によってそれは違うと思うんですが、私のほうでは食事は丁稚から番頭、主人まで全部一緒です。ただし食べる場所が違います。父と私は普通に畳ひいたところですし、お袋やかおばあさんは一段下った板の間で、それから働いておられる方は立っておられて。店でも同じことで、番頭さんや手代さんは板の間に畳べりをひいたところでおられる。ところがこちらへ来ますと、神戸の方で洋食をよく食べていたことがありました。その違いが今日のお話を聞いていても、面白いなあと思いました。ちょっとまあ、私も年齢を取ったから、時代の一証言者としてお話させていただきました。どうも失礼いたしました。

**三宅：**貴重なお話をありがとうございます。いわゆる船場の商家の、食べる場所まで分けられているというところから、やっぱり阪神間ってというのは全く違う価値観だったんでしょうか。

**河崎：**そうですね。やはり今のお話を聞いて、主が座らないとお箸をつけられれないとか、そういう厳しい躰を受けた。それがこちらへ移ってきたら独自の、自分のファミリーっていうのかな、それを形成できるっていうことで、それこそ神戸に食べに行ったりとか、時代的におそらく、そこでハンバーグとかを食べられたんだろうと思います。その食というものは、今とそんなに変わらないんじゃないかな、食の内容的なもの。そういう感じはしますね。

**三宅：**いわゆる商業という強い伝統的な仕組みの中の、船場っていう文化が基盤になっているにも関わらず、非常に自由な空間が形成されたっていうのは、非常に面白いところですね。

**質問者 4：**すみません、三宅先生にお聞きしたいのですが、最近ですね、食品の資料なんですけれども、内閣官房に出された資料の中で、森記念財団の都市戦略研究所と三菱総研が合体してすごく

■

精緻な研究をしているんですね。それで、日本の都市特性評価ということで、2018 ということで、速報を出しているんですけども、これはちょっとあまり表に出ていないんですけど、その中で論文がありまして、その中に、今日に関する文化交流というところがありまして、かなり細かい資料をもとに精緻な研究されていると思うんです。東京、大阪市、四位が神戸市だったんですよ。これは、やっぱり二位と四位を取っているのが、阪神間モダニズムの影響がすごく大きいなと思って感心しているんですけど、なんで当初から阪神間モダニズムにこだわったのか、よくわからないんですね。京都があるのに、京阪神にしとけばもっと広い文化圏が築けたんじゃないかと思うんですけど。今が分水嶺としたら、もう一回再構築して京都大阪神戸で、なんか出来ないかなと思うんですけど、どんなものでしょうか。もっと大きな連携体造って。

**三宅：**一方でそういったゆるやかなネットワークというのも大事かなと思うのですが、今ふと思いつかないのですが、河内先生いかがでしょうか。

**河内：**無理だと思います。あのね、江戸、大阪、京都、三都って言ったのはね、やっぱり大阪と京都は違うんですね。阪神間は大阪と繋がっています。間違いなく地続きで。大阪と京都は背景色と建物も違いますし、背負っている地方も違うんで、これは二つ、違う個性を発揮していいんじゃないでしょうか。

**三宅：**いわゆる三都の時に、江戸、京都、上方の三都で、京都から見ると江戸と同じくらい、大阪と距離があったと言われてます。

**河内：**心理的な距離感があつたらしいので、それは文化的にも面白いことなので、ある意味豊かなことなんですよ。だから地理的に近いので京阪神と言うんだけど、どうもやっぱり大阪と京都というのはまた違うなというのを、私は実感としてありますね。

**質問者3：**言葉はね、京都と大阪とわりと通じるところがあります。人が出入りする、そのことが結構あるもので、言葉は大阪と京都はわりと近いものはあります。

**河崎：**これはちょっと、ややこしいことになるのかもしれませんが、昔から大阪人からみた京都というのは、このなかに京都の方がおられたら失礼になるのかもしれないですが、大阪からみた京都はアガリ



■

なんですね。あそこが最終地点、憧れの地。戦前のモダニズム時代に開けて行った先は南へは手塚山から南の方、東へは枚方であるとか、それから京都方面へは高槻とか吹田であるとか、それで北方面は花屋敷、池田、これは何か風水にも関係するみたいです。それから、西へは阪神間なんですね。つまり、京都へ住居を移すということは、よっぽどの理由がある方でないと。だから今の「無理です」という一言だと思います。大阪人にとって、今でもインタビューで「京都人は…」と、まああれはプロデューサーが悪口ばかりピックアップしているのですが、でもその心というのは、皆さんそれぞれにお持ちじゃないかなと僕は思うし、実際に大阪人から見た京都は本当に生活圏のアガリというか、日本においてあれ以上の生活はないというか。

**河内：** だけどね、京都から大阪の方へきた人はね、いい仕事していますよ。さっきも話した梅棹忠夫とかね、山崎正和とか皆そうです。

**河崎：** ほっとしちゃう。

**河内：** ある種の解放感があって、溜まっていたものがぱっと解放された時って人間が一番自由になれるから。だから湯川秀樹も、苦楽園在住の時に中間子論を思い付いて、あれは非常に解放されていたのだと思います。

**三宅：** 色々とありがとうございました。終了の時間が近づいて来ています。お昼から長時間に渡って、皆様ご協力頂きましてありがとうございます。今回の目的は、この阪神間モダニズムを今後どう伝えていくかと共に、その為にどんなことが出来るかということで企画させて頂いたわけですが、最後に今回のテーマについて、お二人の先生から一言ずつ、今後に向けてエールを頂ければと思います。

**河内：** まあ、万博がどんなものになるかわからないのですが、例えばもう一度西から情報を発信するチャンスを増やしてくれるのならば、これは非常にいいことなので、そういう風にまだ戦略も練られると思うのです。例えば皆さんご存知ないと思うのですが阪神電車がですね、中国の天津の方で、「村上春樹の故郷、阪神沿線」というPR運動をやったらしいのです。つまり中国で村上春樹ファンが多いから。阪神電車もそんなことを考えてやっています。一番頭にきたのがですね、東京で聞いた意見で、東宝が数年前に『阪急電車』という映画をつくったんですね。天下の東宝が、なぜ関西のローカル線に映画をつくるんだ、と。あの東宝というのは、東京・宝塚の

略なんです。ですから東宝の故郷である阪急沿線の映画をつくっているのに、それほど東宝が東京・宝塚であることがわからなくなっているのも、もう一回情報発信機能を増やさないとですね、わからないで終わってしまうとか、そういうチャンスになる万博なら意味があるなと思います。

**河崎：**またあやふやな意見になりますけれども、今の時代、僕は情報とかよりも、外と言ったら失礼ですか、阪神間以外から阪神間へ転勤とか色々なことで、ここ数年で生まれている方ってパーセンテージでいうとすごく多いんですよ。いわゆる何代かで生まれている方は2パーセントくらいだと聞いていますね。その方々がテレビなんかで囃し立てられるからなんですけれども、セレブの街とかなんか言われて、それに乗っかっている、男性もですけど特に若い女性が非常に多いのが。ああいう方々を教育するわけじゃないですが、ああいう方々が成長して、地のこととか、精神的なこととか住み方だとかをわかっていくとか、理解していく、それまでずっと住み続けて頂くということが大事で、おそらく僕は三代かかると思います。世代的には。親の代で息子娘が見て、いやそれは違う、もっとここはこうだと孫に伝えて、孫がそこで育って、でも今の時代、孫は東京とかは行ってしまいます。だからその繰り返しが続くんじゃないかなという気がしますね。だからまずは住んで、その街を深く理解していくということが、自分達は芦屋西宮に住んだからと言って、踊ってしまわずに。住んだからと言って、収入が上がるわけじゃないですから。やっぱりそういう意味でのその場というもの理解していくということが大事なんじゃないかなと思います。

**三宅：**楽屋でもものすごくたくさんご提案をされていたんですけど、これでいいでしょうか。

**河内：**私は今、舞台の制作が増えているので、どんどん地元ゆかりの新しいプロデュースをやっていききたいとか、そこに徹しているかと思っています。この間も、芦屋ルナホールに美貌のバイオリニスト、川井郁子さんに来て頂きましたけれども、芦屋で育った貴志康一の曲を演奏してもらおうとか、そういう風にまめに工夫して、全部ゆかりのものをやって頂いたのです。芸術文化センターのほうでは参加をしていますので、地元ゆかりの作品をどんどん発表していく予定です。今度近いうちに、チェロと義太夫の合奏で、新しい貴志康一をやってみたいと思っています。これぞ阪神間らしい企画をやりますので。

■

**三宅：**河崎先生は今日またこれから横浜に行かれて、阪神間の宣伝に行かれるのでしょうか。

**河崎：**特にあれなんですけど、まあ僕自身が学芸員としてやってきたこと、先程も申しましたようにとにかく資料を集めて、出来るだけたくさんの方に観て頂くということが一番大事じゃないか、まだまだ古いお家には昔の写真であるとか、時代を観ることができるものがあるんじゃないか。それをまあ、お家の方に了解を得て、一般的に昔はこうだったと視覚的にも体感して頂く。それによって先程申し上げたように、阪神間は昔はこうだった、これからどうしようということの後押し出来ればと思っています。

**三宅：**ありがとうございます。私は、学生の時に「阪神間ルネッサンス」というここで行われていたイベントを観て、先生方に憧れてこの世界へ入ったわけですがけれども、先生方がそれまでには言われていなかった、阪神間の近代史を「阪神間モダニズム」ということで新たに提示をされ、今もそれが続いているわけなんですけれども、今私達が見えていないけれどきっと、この阪神間ではなにかが生まれていると思うのですね。そういうことをまた、探して行かなければならないなということを、非常に痛感しましたし、引き継がれているものというのがまだまだ潜在的に眠っているということを改めて感じたところで、今日は阪神間モダニズムの象徴であるこのホテルも、すごく笑っているような気がして、こういう話をしてほしかったんだっていうことを感じることもあります。それで、この問題については、今後、これからの重要であると思いますので、今日来て頂いた皆様方も、色々ご提案なり議論を続けていきたいと思っておりますので、今後ともこの生活美学研究所を含めてよろしく願います。本当に今日はありがとうございました。先生方にはお忙しいなか、時間を作って頂きまして、本当にありがとうございます。最後に拍手で終わりたいと思います。ありがとうございました。

**国吉：**ありがとうございました。

**森田：**皆様いかがでしたか。どうぞお気をつけてお帰りくださいませ。また再び、この会場でお会いするのを楽しみにしております。本日はどうもありがとうございました。

# PROFILE

## ■ シンポジウム講師ご紹介 ■

### 講師プロフィール

#### ●河崎 晃一 / KAWASAKI Koichi

1952年芦屋市生まれ。74年甲南大学経済学部卒業。77年長谷川三郎画集編纂。78年から染色による美術作品を発表。89年から芦屋市立美術博物館学芸課長。小出 楯重、吉原治良、具体美術協会、阪神間モダニズム展などを企画。2006～12年兵庫県立美術館学芸リーダー、館長補佐。13年から甲南女子大学文学部教授。93年ベネチア・ビエンナーレをはじめ、15年アメリカ・テキサス州ダラス美術館で開催の白髪一雄 / 元永定正展、18年 NY のギャラリーで具体 1953-59 展を企画。

#### ●河内 厚郎 / KAWAUCHI Atsuro

西宮市生まれ。演劇評論家として執筆業に入る。「関西文学」編集長を2期15年つとめる。阪急文化財団理事。兵庫県立芸術文化センター特別参与。はびきの市民大学・学長。三田市総合文化センター事業企画アドバイザー。文化庁芸術祭・審査員。芦屋市民センター・公民館・ルナホールの事業受託者(河内厚郎事務所)。著書に『わたしの風姿花伝』『淀川ものがたり』など。

#### ●三宅 正弘 / MIYAKE Masahiro

1969年芦屋市生まれ。大阪大学大学院博士課程修了。博士(工学)。武庫川女子大学生活環境学部准教授。フランス人文科学研究所・受入教授などを経て現職。専門は都市計画・美食空間学。大阪市・区長アドバイザーを務める。著書に『甲子園ホテル物語—西の帝国ホテルとフランク・ロイド・ライト—』(東方出版)『遊山箱—節句の弁当箱—』(徳島新聞社)、『石の街並みと地域デザイン—地域資源の再発見—』(学芸出版)、『神戸とお好み焼き—まちづくりと比較都市論の視点から—』(神戸新聞総合出版センター)等多数。

## 生活美学研究所構成員

所長		森田 雅子	教授
運営委員会	委員長	森田 雅子	教授
	委員	三好 庸隆	教授
	委員	柏木 敦子	教授
研究員		管 宗次	教授
		藤本 憲一	教授
		黒田 智子	教授
		大森いさみ	教授
		三宅 正弘	准教授
		鎌田 誠史	准教授
		藤井 達矢	准教授
		村越 直子	准教授
		宇野 朋子	准教授
		松本佳久子	准教授
		井上 雅人	准教授
		和泉 志穂	講師
(囑託)		津曲 孝	
		ケーキハウス ツマガリ 代表	
		坪内 稔典	
		京都教育大学名誉教授	
		佛教大学名誉教授	
助手		加登 遼	
		井本 真紀	
		酒井 稚恵	
		泊里 涼子	

2019年7月1日現在

---

## 阪神間ルネッサンスのために

---

ここで、「阪神間文化」の生活美学的実験を。

---

生活美学研究所が居をかまえる甲子園会館(旧甲子園ホテル)は、武庫の流れをのぞみ、ゆたかな緑につつまれて、文化的環境デザインの実験場であった。

世界各地から人士が集い、ゆるりとホテルで憩いながら、多彩な議論をかわす理想郷であった。

この環境は、さきのいくさによって一度は失われたものの、今ふたたび甦りつつある。ここに新たな「生活美学」の視点から、阪神間に住まう人士とともに、しずかなる実験の一步をしるしたい。

## 武庫川女子大学 生活美学研究所

〒663-8121 兵庫県西宮市戸崎町1番13号

TEL 0798-67-1291

FAX 0798-67-1503

E-mail. [seibiken@mukogawa-u.ac.jp](mailto:seibiken@mukogawa-u.ac.jp)

URL. <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~seibiken/>